聖徒の道

末日聖徒イエス・キリスト教会

聖徒の道

1961年1月号

もくじ

〔予言者のことば〕
「人あらたに生れずば神の国を見ること能わず」
……デビド・O・マッケイ…(1)

〔伝道部長メッセージ〕
「新しき年の目標」……ポール・C・アンドラス…(5)

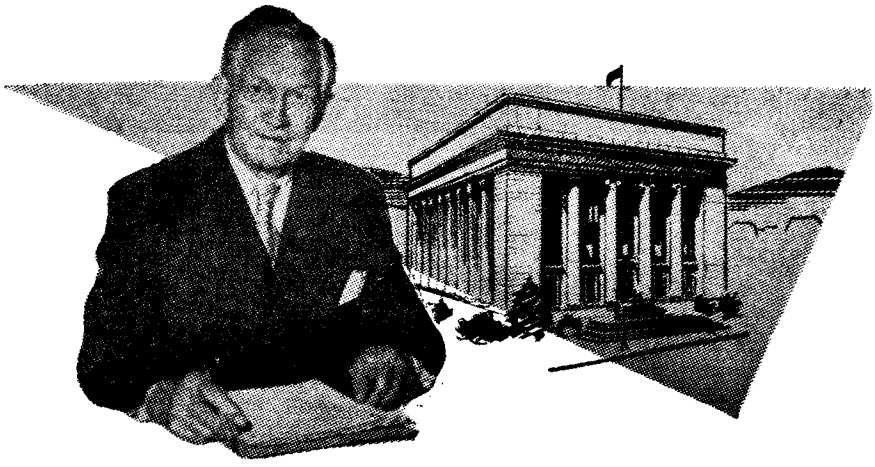
〔モルモンの教義〕
「結婚—永遠の誓約」(20)……佐藤龍猪…(8)

扶助協会特集

末日聖徒イエス・キリスト教会　扶助協会…(11)
1　1959年度報告……(12)
2　家は知恵によりて
……フランシス・P・アンドラス…(13)
3　夫に対する妻の責任……松川リツ…(15)
4　子供に対する母親の責任……阿部てい…(16)

系図

モルモン教と真言密教……渡部正雄…(18)
新年随想・若さについて……遠藤肇…(20)
光を再びうけた頃……高木冨五郎…(23)
私の証……アルマ・ソーン…(27)
私の改宗……吉田道乃…(30)
私のひとりごと……佐伯忠晴…(31)
ユタ物語(4)…リーヴァイ・エドガー・ヤング…(32)
末日聖徒イエス・キリスト教会歴史粋(13)
ジョセフ・フィールディング・スミス…(36)
伝道本部だより……(40)



予言者のことば

「人あらたに生れずば神の国を見ること能わず」

大管長　**デビド・O・マッケイ**

「福音の第一原則と儀式は数多くあるが、バプテスマはその中の一つである。バプテスマは教会で行われる確立された習わしとして、明らかに儀式の一つになっている。厳密に考えると、バプテスマは信仰と悔改めが原則であるという意味に於て、一つの原則であるとは考えられないかも知れない。しかしながらバプテスマは神の力によって樹てられた律法である故に一つの原則になるのである。

バプテスマは救われるために欠くことのできないものである。従って、イエスはこの世で導きとめぐみを施して居りたもうたとき、ユダヤの参議院の一員であるニコデモがイエスを夜おとずれた際、始めてバプテスマについて考えを聞かせたもうた。このことは聖書に記してある。私はニコデモがイエスを昼間おとずれるのを恥じたとは思わない。ニコデモは忙しい人であったと考えている。ニコデモは参議院での仕事やその他の事で多忙であったから、できるなら夜分救い主をおとずれて共に一時間乃至二時間を過した方がよかった、というわけで私は夜「イエスの許に来りて」という聖句に解釈を施したい。

重大な意味の言葉のやりとりがあって、二人は救いということをくわしく論じたが、キリストの最初に仰せになったのは「人あらたに生れずば、神の国を見ること能わず」という御言葉であった（ヨハネ伝三〇三）。これは人がよくよく考える価値が充分にある文である。この世の事物を見ることは易しい、みだらな事を見るのは易しい、何事にまれ肉体に関わる動物のようなことに耽けることは一層容易である。それは動物の世界のことである。しかし、その動物の世界から霊の世界に生れ出ることは、主がわれわれに要求して居りたもうことであり、また主が親しく示したもうた模範である。人はその動物の世界から再び生れ出るのでなければ、愛、親切克己自制等、霊に関わるこれらの徳が真人（まことのひと）の進歩発達に力を与えるところの霊の光を見ることができない。ニコデモはそれが解らなかったので「人はや老いぬればいかで生きることを得んや。再び母の胎に入りて生るることを得んや」と言った（ヨハネ伝三〇四）。

いかに彼の解釈が物質的であるかを見たまえ。その時、救い主はさらにはっきりと「人は水と霊とによりて生れずば神の国に入ること能わず」（ヨハネ伝三〇五）と仰せになった。ここにバプテスマの本質的意義がある。この文の中に人生の目的、すなわち物質的な生活動物的な生活を克服して霊の国に生きようとする目的があらわれている。

バプテスマには、霊が成長するための基本の原則が含まれている。それらの中三つを挙げると、それはすなわち誠実と純真と清浄ということである。誠実はこれまで「高貴なる諸徳の母」と定義されている。純真と清浄とはまことに「人類がこの世とあらゆる物質的のものより高く舞上ることのできる両の翼」である。

これら三つの徳すなわち誠実と純真と清浄とは、バプテスマという神聖な儀式を施してもらいたいと思う人が皆もたなければならない徳である。この人は誠実な心で創り主の前に進み出て、へり下った悔改めの心で自分の弱点と誤ちとを認め、新しい生活を送りたいという望みを表わさなくてはならない。この人は何ら自分を利する目的を持たずに奉仕をしなくてはならない。この人は誠心から「神の羊の群に」入って主の民の一人として数えられたいとねがい「他人の重荷を軽くするためにそれを背負いたい」とねがわなくてはならない。このようにしてのみ、真の悔改めという永遠の原則を表わすことがでるのである。

清浄とは心情の清いことである。心の清い者は「神と合してひとつとなる」。まことに「心の清き者、その人は神を見ん」。心の汚れている人は、幾百遍バプテスマを受けても神に近づくことはできない。

純真とは志の純く真（まこと）なことである。純真の徳は人を促して従順ならしめるによって、外見を飾る欲、世間に知られたい欲、自分の名誉この世の利益を得たい欲などを取り除

く。立派な志の人には神の誡命の一つに従いたいという純真な欲望だけが表われる。

バプテスマは神の国に入る入口である。バプテスマは神の国に入る門であって、水に沈められることによってその門に入ることは重要な意味がある。水を振りかけるだけでは神の国に入ることはできない。それは水に沈めることの持っている大切な象徴を台なしにする。水を注ぐだけでは神の国に入ることはできない。ただ水に沈めることによって始めて、イエスが仰せになった「あらたに生れる」ことが正しく行われるのである。われわれが埋められるところの元素が三つある。第一は空気、これはわれわれがその中に住んでいる自然の元素である。第二には土、土はわれわれを埋めることができる。土は物質的なものをとって始末をつけてしまう。第三は水であって、われわれは水の中へ埋められてまた出てくることができる。これは一度葬むられてまた新たに生れて出ることを完全に象徴している。それは、われわれが霊的なものを垣間見ると、動物的な生活をその欲望と耽溺と共にうち捨て、自分の性格の内にある肉体的な面のかわりに霊的な面を発展させたいと思うことを表わしているからである。

われわれはこのようにして水の中に葬られ、食欲情欲誘惑等と共に「旧き人」を葬って再び新たに生れてくる。われわれはバプテスマによってキリストと共に葬られ再び生れるのであると使徒パウロは言った(ロマ書六〇四参照)。キリストが葬られて新しいいのちに生きたもうたように、われわれもわれわれの悪い習慣、われわれの敵、憎しみなどをことごとく水の中に葬って新しいいのちに生れてくるからである。

キリスト・イエスは、バプテスマが欠くべからざるものであるとお考えになった故にバプテスマのヨハネのところへ来りたもうた。ヨハネはこのとき「われは汝にバプテスマを受くべきものなるに、かえってわれに来りたもうか」と異議を申立てた(マタイ伝三〇十四)。

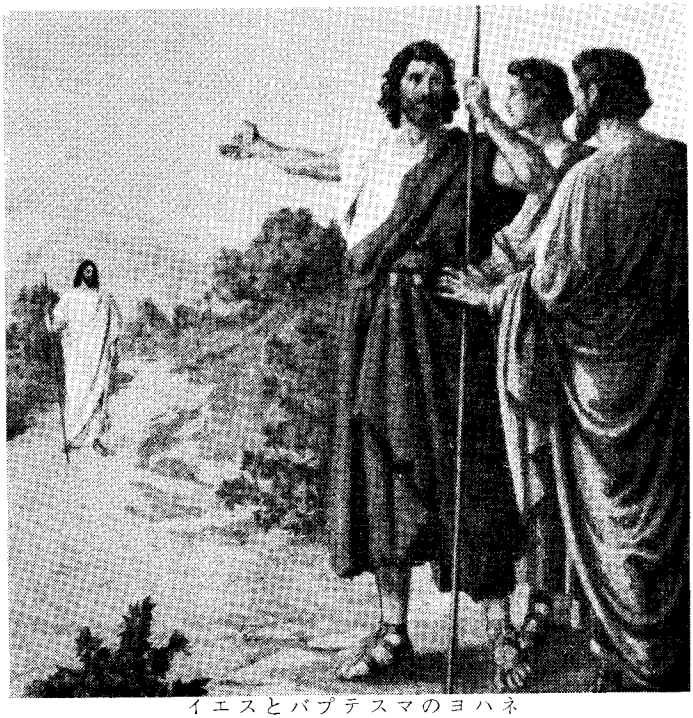
これに対して救い主が「今は許せ、われらかく正しきことをことごとくし遂ぐるは当然なり」(マタイ伝三〇十五)と仰せになると、ヨハネは救い主にバプテスマを施したと言うことである。「正しきことをことごとくし遂ぐる」ことは神の命令である。従ってそこに神の国に入る入口がある。神の命令を従順に聞く、そうすればわれわれは「正しきことをことごとくし遂ぐる」に当っておそらく与えられる最も美わしいまた最も適切な態度を持つのである。われわれは自我を葬り、自己の悪習慣を葬り、自己を葬り、かくしてキリストが復活して出で来りたもう如く新しいいのちに生れ出るのである。

葬りであると共に新しい誕生であるバプテスマは正しい権能によって執り行われなくてはならない。もしわれわれ

が、アメリカ合衆国もしくはどの国の市民にでもなりたいと思うならば、権能を持っている役人が執行する或る法律に従って或る要求を満さなくてはならない。イエス・キリストの教会でもこのように執り行う故に、正しい権能を持つ者によって執行される水に沈めるバプテスマは神の国に入る一つの門戸である。

バプテスマは第一に、神が親しく定めたもうた儀式であって、律法に従うという義の永遠なる原則と手をつないでいる故に、人類の救いのために立てられている。第二に、バプテスマは入門の儀式であってキリストの羊の群の一員とならせる門口である。第三に、バプテスマは「前の人」がそのすべての弱点と不完全と共に自己を葬って新しいのちに生れ出ることを表わしている厳粛な象徴である。

バプテスマの儀式は神の律法である故に、誠実と清浄と純真とを以てこの律法に従うならば、「聖なる導き手」、「慰め主」なる聖霊の約束したもう祝福を賜わること必然である。儀式を変え律法に背く者は誰一人この「慰め主」を知ることができない。人々があざけり笑おうとも、ひやかそうとも、その効果を疑おうとも、バプテスマは人に知られた最も美わしい象徴としてのみならず、また人類の救いのために働く最も効果ある律法の一つとして、その簡単な姿を変えることなくいつまでも続くのである。そこで、すべてほかの事に於けると同じくバプテスマに於ても、あらゆる人々は「われは世の光なり、我に従う者は暗きを歩まず、生命の光を得べし」（ヨハネ伝八〇十二）と仰せになったお方に従わなくてはならない。



イエスとバプテスマのヨハネ

《伝道部長メッセージ》

「新しき年の目標」

ポール・C・アンドラス

今や新年を迎えるに当って、私たちは当教会の会員一人のこらずの肩にかかっている三つの大きな責任を思い起さなくてはなりません。その第一は、私たちの生活の中で教会の教えを実践することであり、第二は、ほかの人に福音を教えることであり、第三は、今は此世にない血縁の人々が救われたための仕事をすることであります。

私たちが自分の生活の中で教会の教えを実践するとは、神の誡命に従うことであります。神の誡命の一つに、研究と信仰とによりて学問を求むべし（教義と聖約八十八〇百十八）という誡命があります。それでありますから、私は本伝道部に属する教会員のすべてが、昨年すなわち千九百六十年に行った以上に、新しい年である千九百六十一年中にこの誡命に従わねばならないと信じます。あなた方の中、何人が千九百六十年にモルモン経を読み了りましたか。新約聖書、教義と聖約、高価なる真珠、旧約聖書についてはどうですか。あなたは、当伝道部の宣教師が一人のこらず千九百六十年中にモルモン経を一回でなくて二回、新約聖書も一回でなくて二回、教義と聖約を一回、高価なる真珠を一回、その上旧約聖書を一回読み了っていることを知ったら興味を覚えるかも知れません。宣教師たちはどうしてこんなにたくさん読破しましたか。一年を通じて、毎週六日間毎日十ページづつ読むという簡単な方法でこれらをみな読み了りました。私は当教会の会員が一人のこらず千九百六十一年中これと同じことをするように提案いたします。

福音を勉強することは大切でありますが、むろんこのほかにも神が私たちに与えたいと思っておいでになる数々の祝福を受けるために従わなくてはならない誡命があります（教義と聖約百三十〇二十・二十一）。私たちは独りで、また家族と一しょに主に祈りを捧げなくてはなりません。

私たちはいつも自分の身を純潔に保っていなくてはなりません。私たちは、教会の大幹部、そのほか私たちの上に立っている方々を支持しなくてはなりません。私たちは完全に「什分の一」を納めなくてはなりません。私たちは「智恵の言葉」を守らなくてはなりません。私たちは聖餐会、神権会そのほかの集会に出席して、それぞれの会に参加しなくてはなりません。もし私たちがこれらのことを行えば、天にますます私たちの父なる神は、私たちに豊かな報いを賜うにちがいありません。二つの大きな誡命とは汝の心をつくし精神をつくして主なる神を愛し、また隣人を己れの如くに愛せよという誡命であることはもちろんであります。私はこれまでに、心をつくして神を愛し、また隣人を己れの如くに愛することが出来るまでは、「什分の一」も完全に納めず、「智恵の言葉」にも従わず、教会の集りにも出ないという人々があるということを耳にしております。この点について私は次のような立場をとります。すなわち独りでも家族と一しょにも祈りを捧げ、自分の身を純潔に保ち、教会の大幹部を支持し、「什分の一」を完全に納め、「智恵の言葉」を守り、教会の諸活動に参加する人々は、これらのいわゆる小さい誡命を守らない人々よりも、はるかに立派に二つの大きな誡命を守り行っているのであります。これから始まる新しい年の間中、当伝道部に属する教会員が一人のこらず、これまでに啓示された数々の誡命に従い、以て教会の教えを実践するよう切に勧める次第であります。

ほかの人々に福音を教えることは、当教会の会員一人のこらずの肩にかかっている第二の大きな責任でありまして、マッケイ大管長は、これまで教会員の一人一人がのこらず、毎年少くとも一人の人を教会に導いて会員とするようにたのんで居られます。私はこれまでに、福音はその教えを実際に行って模範を示すことによって教えることができるのだという言を度々耳にして居ります。実地に模範を示すということが、私共の教会の中でほかの人々の関心を大いに惹くことができるということには全く同意しますが、しかしまた私は、福音は模範を示すことによってと同様に言葉によっても教えるべきであるという意見を持っております。私は福音を実践して後これに加えるに福音を説明するということ以外に、マッケイ大管長が私たちのために立てた目標を満足する道はないと考えます。あなたは千九百六十年中に、教会へ少くとも一人の人を導いて改宗させましたか。あなたは、現在宣教師たちが用いている標準の教授計画にのっている数々のレッスンを勉強してこれを実行し、以て福音を説明して人を導き改宗させることに成功することができます。この教授計画はきわめて安価に伝道本部から入手することができます。私は千九百六十一年中に、本伝道部に属する教会員一人のこらずが、レッス

「結婚—永遠の誓約」（二十）

佐藤龍猪

各々その頭に結び固められたる如く、各々最高の栄に進むを得てあらゆる事に光栄を受くべし。

「教義と聖約」百三十二〇十九

一、アダムの結婚は永遠の結婚

主なる神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された（創世記一〇二十七）。また主なる神は「人がひとりでいるのは良くない」と言って、アダムに助け手としてイヴを与えたもうた（創世記二〇十八、二十二）。アダムにイヴが与えられた時、その結婚は永遠の結婚であった。それはその当時世界に「死」というものがなく、「死」はアダムが「堕ちた」ために始めて世界に入って来たからである（ニーファイ第二書二〇二十二—二十五参照）。「死」の種子がこの世に蒔かれて、人が神の前から遠ざけられた後も、アダムとイヴの結婚は破れなかった。アダムは「土地を耕しすべての野の獣を治め、彼の額の汗によりて食物を食うことを始め」、その妻イヴもまた「彼と共に」働いた（「高価なる真珠」モーセの書五〇一参照）。この神聖な結婚関係は永遠につづいて、アダムは「すべての人の君、最も老いたる者（Ancient of Days）」（「教義と聖約」二十七〇十一）として、またイヴは「すべて生きた者の母」（創世記三〇二十、「高価なる真珠」モーセの書四〇二十六）として、二人とも永遠にその子孫からあがめられるにちがいない。始めに「人がひとりでいるのは良く」なかったと同様に、現在もまた将来も「人がひとりでいるのは良くない」。「別離孤独」の男女は、主が備えたもうた「最高の栄に進み得る」ことができない（「教義と聖約」百三十二〇十七参照）。人が一人前となったとき「その父と母を離れて、妻と結び合い」（創世記二〇二十四）、完全に義しい状態に於て永遠につずく結婚関係に入るのは神のみこころである。

パウロは「主にあっては、男なしには女はないし、女なしには男はない」（コリント前書十一〇十一）と言って居り、また主は「彼のために、ふさわしい助け手」となる相手をアダムに与えようと言いたもうた（創世記二〇十八）。この「助け手」とは結婚によって生ずるすべての必要に応えるばかりでなく、この世にも永遠にもわたる人間の使命について主なる神の目的が完全に遂行されるための「助け手」である（「救いの教義」第二巻七十頁参照）。主なる神がアダムにイヴを与えたもうたとき、アダムは「これこそ、ついに私の骨の骨、わたしの肉の肉」（創世記二〇二十三）と言ったが、救い主イエス・キリストも「それ故に、人は父母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりの者は一体となるべきである。彼らはもはや、ふたりではなく一体である。だから、神が合わせられたものを、人は離してはならない」（マタイ伝十九〇五・六）と言って、結婚が永遠であるべきことを確認な

ンを説明するための「フラノボード」の使用を含むこの標準宣教師計画に従い、以てほかの人々に福音を教えることに熟達するよう勧める次第であります。マッケイ大管長は本年中に少くとも一人の人を教会へ導いて改宗させるようあなたにたのんでおられます。あなたはそれをして下さいますか。

当教会の会員一人のこらずの肩にかかっている第三の大きな責任は、今は此世にない血縁の人々が救われるための仕事をすることであります。いわゆるキリスト教の教義によると、これまでに地球上に生を受けたがバプテスマを受けずに此世を去ったすべての者は、全く救われる望みがなくて地獄に投げ込まれなくてはなりません。しかし、幸運にも、これまでに地球上に生を受けた大部分の人々にとって、この教義は本当ではありません。実際は、神の子たちがすべて救いを得て地獄から救われる公平な機会を持つために、神の子たちのすべてに与える備えをなさっております。自分のあやまちでなくて、死ぬ前にバプテスマを受けて福音を受け入れることのできなかった者はすべてあの世に於て福音を受け入れる公平な機会をもつにちがいありません。すでに此世を去った多くの人々は機会のあり次第福音を受け入れるに相違ありませんが、救いに必要なバプテスマそのほかの儀式は今生きている者たちが死んだ人々のためにこの地球上にある神殿の中で執り行わねばなりません。もちろん、この神聖な儀式は誰のために執行するかがきまって始めて行うことができます。これには探求が必要であって、私どもの亡くなった先祖のためにこの系図の探求を行う責任は、はっきりと私ども生きている者の肩にかかっております（マラキ書四〇五―六）。当教会の系図組織は世界最良の組織であって、系図探求を行いたいと思う人は探求の方法に関する充分な援助と資料とを容易に得られます。私は教会員一人のこらずが各自の先祖の救いに必要な仕事を今年中ぜひ行うように勧める次第であります。

全体から見て、千九百六十一年という年は教会にとって最大の年になろうとしています。個人としてのあなたにとって、千九百六十一年はどのような年になろうとしていますか。あなたが自分の生活の中で教会の教えを実践するならば、またほかの人々に福音を教えるならば、また今は此世にない血縁の人々が救われるための仕事をするならば、千九百六十一年はあなたにとって偉大な年となるにちがいありません。

さった。予言者ジョセフ・スミスは「結婚はエデンの園で制められた天の制度である。されば、永遠なる神権の権能によって結婚の儀式は執り行われねばならない」と教えた（「救いの教義」第二巻七十頁参照）。

アダムとイヴは最初エデンの園に居たとき、永遠なる父なる神により永遠の誓約である結婚の式を挙げた。すべての結婚が永遠の誓約でなくてはならぬことは主なる神のみこころであり、男女は「一体となる」ことによって、この世のみならず永世にわたり、主の計画に従い結婚の状態をつずけるべきである（「救い教義」第二巻七十一頁参照）。

二、天界の結婚（「教義と聖約」第百三十一章、第百三十二章参照）

復活ということはないと言い張っていたサドカイ人のある者たちが、イエスに近寄ってきて次のような質問をした。「ここに七人の兄弟がいました。長男は妻をめとりましたが、子がなくて死に、そして次男、三男と、次々にその女をとり、七人とも同様に子をもうけずに死にました。のちに、その女も死にました。さて、復活の時には、この女は七人のうち、誰の妻になるのですか。七人とも彼女を妻にしたのですが」と（ルカ伝二十〇二十七―三十七、マタイ伝二十二〇二十三―三十二参照）。

イエスは彼らに言われた「この世の子らは、めとったり、とついだりするが、かの世に入って死人からの復活にあずかるにふさわしい者たちは、めとったり、とついだりすることはない。彼らは天使に等しいものであり、また復活にあずかるゆえに神の子でもあるので、もう死ぬことはあり得ないのである」と（ルカ伝二十〇三十四・三十五）。

結婚はバプテスマと同様に、現世に於て執り行わねばならない儀式である。死後に於ては、バプテスマと同様身代りの者によるほかは執り行うことができない。イエスはバプテスマについて質問されたなら「バプテスマもすることはない」と仰せになったであろう。此世に於て与えられた福音の儀式は、すべてこの世に関する儀式であるから、当事者は此世に於て執り行わなければならない。死後に於ては身代りの者しか執り行うことができない。

イエスは彼らに答えて「この世の子らは」と仰せになったが、読者はヨハネ伝第十七章九―十六節の聖句を思い起していただきたい。イエスは「この世（すなわちサドカイ人の属する世）の子らは今めとったり、とついだりするが、かの世に入って死人からの復活にあずかるにふさわしい者たちは（かの世に入って、すなわち永遠の結婚をせずに日の栄の王国に入って最高の栄に進むことのできない者たち、かれら死人からの復活にあずかるにふさわしい者たちは）めとったり、とついだりすることはない。彼らは天使に等しいものであり、また復活にあずかる故に神の子であるので、もう死ぬことはあり得ない」と仰せになったのである（「救いの教義」第二巻七十二頁参照）。

これはジョセフ・スミスに下された啓示と全く一致している（「教義と聖約」百三十二〇十六・十七参照）。そこには「この故に彼ら（すなわちこの世の子らであって完き律法を守らぬ者たち）この世の外に去る時は、めとり嫁ぎすることはなくして彼らは天に於て天使に任命せらる。而してこれらの天使は、彼らよりも遙に高き光栄に適しき、また優れたる光栄、永久の効ある光栄に適しき者に奉仕すべき奉仕の僕なり。これらの天使はわが律

法を守らざりし故に、殖ゆることを得ずしてただ別離孤独にて最高の栄に進み得ることなく救われたるまま永久に変らず。これを以て彼らは神々にあらず永久に神の天使なり」とあって天界の消息がきわめて明瞭に伝えられている。これは永遠の結婚誓約をすててかえり見なかったが、ある程度の救いを得る者たちにも正しく適用せられる。永遠の福音である真理を受け入れなかった者はめとり嫁ぎすることがない。天界まで結婚の誓約が有効であるための特権は、主の誡命を完全に守り神の律法に従順である者に限られる。月の栄の王国、星の栄の王国に入る者、また日の栄の王国に入っても最高の栄に昇らない者には制限があって、無上完全の光栄を受けることができない。これらの者はその居る所の国に適するように体が変る故に、めとり嫁ぎすることなく、また殖えることもできない(「教義と聖約」第百三十一章、および第百三十二章十九・廿節、「救いの教義」第二巻七十三頁参照)。

三、結婚―最高の栄に昇るための誓約

末日聖徒は、結婚を日の栄の中の最高の栄に昇るための誓約であると考える。主なる神は予言者ジョセフ・スミスに啓示を下して、結婚誓約が永遠につずくことと、死後にも家族関係が永遠につずくことを教えたもうた(「教義と聖約」第百三十二章参照)。またこの啓示の中で「わが家は秩序の家」である故に「この世にあるあらゆるものは、たとえ人により王により公によりまたはそのほか権力によりまたは名義上のことにより、何にてもあれわれに由らず、またはわが言によらずして定めたることは崩れ去りて人の死にたる後復活に於てもその後に於ても遺ることなかるべし」と仰せになった(「教義と聖約」百三十二〇十三参照)。従って、主なる神が関係したまわない、すなわち主の御言である律法によらない、人のつくった契約は契約当事者の死を以て終りを告げるのである。

従って、永遠の福音を受け入れていない当事者たちがこの世でつくった契約はもちろんのこと、あらゆる結婚契約もその当事者たちがこの世を去れば終りを告げる。結婚の契約がこの世のみならず永世にわたって有効であるためには、その当事者たちがそのような祝福の定めてある神の律法に従って結婚をしなければならない(「教義と聖約」百三十二〇五―十四参照)。

主なる神は啓示の中で「この故にある男もしこの世に於て妻をめとるに、われに由らずまたわが言に由らずしてめとり、またその男この世にある限りその妻と誓い、妻またその男と誓うに、この誓いも婚姻も彼ら死にてこの世の外に去る時は効力あることなし。この故に、この二人この世の外に去る時は如何なる律法もこれを結ぶことなし」(「教義と聖約」百三十二〇十五参照)と教えて居りたもう。この二人は死後互いに「わが夫である」、「わが妻である」と主張する権利がない。またその二人の間に生れた子供たちにも「わが子供である」と主張する権利がない。その子供らは両親のないまま打ち捨てられ、自分たちが神の律法に忠実に従うことによってのみ、ほかの家族の子供として養子縁組をすることができるのである(「救いの教義」第二巻六十一頁参照)。

しかしながら、「今も永世にもわたりて結び固むる権能を保有する」者を通じて、「約束の聖きみたま」により神殿に於て「結び固め」られた者たちが、その時の神聖な誓約を

(三十五頁へつづく)

（扶助協会々長会）

末日聖徒イエス・キリスト教会

扶　助　協　会

起　源

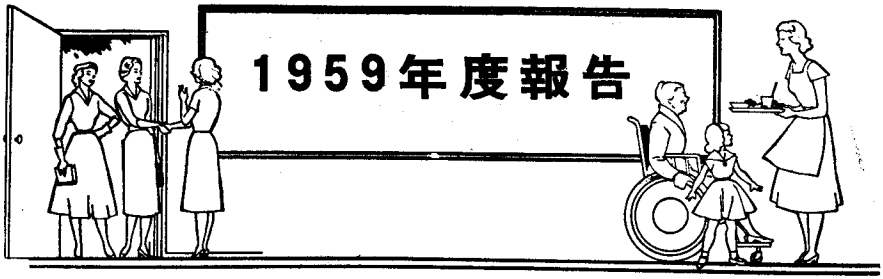
扶助協会は末日聖徒イエス・キリスト教会にとって最古の補助組織であり、千八百四十二年三月十七日にアメリカ合衆国イリノイ州ノーヴーにて予言者ジョセフ・スミスにより、「神権者組織に倣って」又神権者組織の補助機関として組織された。扶助協会のあらゆる活動は神権者の管理・監督と指導のもとに行われる。

目　的

扶助協会の初期の集りにあって予言者が述べた事で又後程次第に扶助協会内で明らかにされ且つ大きく培われてきた目的に次の如き事項がある。

一、主義、主張、国籍を問わず博愛を及ぼすこと。
二、貧人、病人、不幸な人の面倒をみること。
三、忌中の家にあって奉仕すること。
四、社会道徳、矯正に助力をなし、社会生活の美徳を強化すること。
五、人間の生活を最高水準にまで高めること。
六、婦人の活動範囲及び地位を向上拡大すること。
七、宗教、教育、文化、風雅に対する愛を育くむこと。
八、信仰を大きくすること。
九、人々を救うこと。
十、福音を学び、且つ教えること。

以上の如き高尚な目的に動かされて、個人、家族及び社会に対する慈悲深い奉仕と他の救済事業とを含む変化に富んだ偉大なプログラムによって扶助協会員及び扶助協会の影響下にある他の人々に霊的面と教育面の向上発展とが推進されつつある。



1959年度報告

一九五九年度の全教会扶助協会年度報告は全世界を通じて二十万三千名以上の献身的な会員姉妹の隣人に対する暖い奉仕と、神性な霊感によって設立され、神権によって導かれて来たこの偉大な協会の集会及び活動へ参加した彼女等の信仰と働らきを表明した。

扶助協会が創立当初即ち一八四二年度の一八人の会員から二〇三、七五二名に成長し、一九五八年度よりも一〇、一九九名の姉妹が増加したことは誠に喜ばしいことである。この会員総数の内一六六、八〇九名がステーキ部に居住し三六、九四三名が伝道部に住んでいる。この扶助協会々員は合衆国の五十州コロムビヤ地区及び五十一の海外諸国に及んで散在しているのである。

一九五九年十二月三十一日現在で二八九のステーキ部に於ける二、六二四のワード部及び支部に於て又四十七の伝道部に於ける一、八二六の支部に於て正式に組織された扶助協会が活動している。これは一九五八年度よりも、一二九の扶助協会が増加していることを示している。

ステーキ部及び伝道部内に於いて総計一三四、〇二四名の姉妹が指導者として、その時間と才能を提供し役員、教師又は家庭訪問教師として活動している。四六、一六五名の姉妹が三、一二六の母親合唱団に参加して音楽進歩の機会を楽しんでいるが、本年度に於て五六二の合唱団と七、二六九の参加者が増加しているのである。

一九五九年度に於て扶助協会の公認機関誌の講読者が七、九六一増加し一六二、五八九家庭の申込数となったのである。

家庭訪問は扶助協会の重要なプログラムの一つであり、教会内の各家庭の肉体的及び精神的な幸福な生活の為の思いやりと友情を以て特長づけられている。この奉仕により八七、五九二名の訪問教師が必要に応じ又霊的メッセージを与える為四七、八二二の家庭に計三、五二九、四七七の家庭訪問をなした。これは一七九、六七五訪問の増加であり年間を通じ各末日聖徒の家庭に対し平均八・四三の訪問となっている。

扶助協会の指示の下に病気見舞及び家事手伝の為三一三、〇四一回の訪問がなされ、三四、八二七の八時間勤務に相当する看護が必要者に対し、ほどこされたのである。七、五九八二回の葬式に対する援助もなされ、又埋葬死者の着つけの為に七三三回も扶助協会員が頼まれたのである。

監督の指示の下に各家庭の援助必要度を決定して監督を援けるべくワード部扶助協会長は七四、七三一回の家庭訪問をなしたのである。

扶助協会の任命により計六七一、五〇一時間の教会福祉計画への奉仕がなされました。又扶助協会の指示の下に、六三、八〇八着の婦人服、四七、三六一着の子供服、及び一七一、五四九着の家事用着、それに男子服、掛布団其の他を合せて計四七六、七六五件の縫物が完成した。

すべての正式な扶助協会の集会即ち神学、文学、社会科学への出席率は増加し、特に縫物や家事を学び仕事の時間への出席率は非常に増大した。

その計画を通じて扶助協会は、教会の女性の為の奉仕及び教育機関としての役割を遂行しているのである。姉妹たちによって忠実な奉仕が与えられているがその結果は、彼女等自身も豊かな祝福を受けているのである。彼女たちの参加により扶助協会は会員の個人的進歩発展に貢献し、その感化力をひろめ、よりよき隣人への奉仕者たらしめるのである。又彼女らの家事手芸を上達させて、よりよき一家の主婦となしているのである。そして生活に対する広い理解と深い感謝の念を育成しているのである。福音の原則と教義に対する彼女らの知識を増すことにより彼女らの証を強め、彼女たちをして福音の真理にしっかりと立たせているのである。

＜扶助協会特集　Ⅱ＞

家は知恵によりて……

フランシス・P・アンドラス
（伝道部扶助協会々長）

今は、大ていの人たちが昨年の生活をふりかえってみて、ことしこそという決心をする年の始めであります。私たちはいろいろ間違いをしましたから、ことしはもっと良い模範を示し、もっと良い父母、もっと良い末日聖徒になり、できるだけ立派に福音を実行したいと思っております。

この世の生活では、私たちの一人一人が父や母として責任を引き受けなければならない時期があります。私はすでに母となる特権を与えられて居りますことを幸福に思っています。また私は、アンドラス伝道部長と私とに五人のすばらしい霊である子供たちがめぐまれ、この子供たちに福音の計画を教えて理解させるようにめぐまれていますことを天の父なる神さまに感謝して居ります。

私は、私の子供たちにとって、正しい指導と直接の模範を通して、神さまは生きてましますこと、イエスはキリストであって十字架におかかりになった後に墓から復活した者と

して出ておいでになったこと、また私たちはみな私たちの霊の父である神さまの子供であることの固い信仰ができるように助けを与えられることが、何よりもねうちのあることであるということを知って居ります。

もしも父母の与える指導を通して、私たちの子供が「信仰に徳を加え、徳に知識を、知識に節制を、節制に忍耐を、忍耐に敬けんを、敬けんに兄弟の愛を、兄弟の愛に博愛を……」（ペテロ後書一〇五―八）加えることを助ける固い信仰を心の中に持つならば、私たちは子供たちに最も貴い親ゆずりの財産を与えるにちがいありません。

私たちの子供に、父母に対する純粋な尊敬をもつこと、生涯父母を敬まいたいと思うこと、純潔に身を保ちたいと思うこと、結婚の誓約を尊びこれを神聖に保つことを教えるのは本当に大切であります。天の父なる神さまが御計画になった結婚は永遠の結合であって、此世かぎり結ばれているというわけではありません。

両親としてもし子供たちに良くなってほしいと思うなら、私たち自身が良くなくてはならないことを私は知って居ります。もし私たちの子供に「智恵の言葉」を守らせたいなら私たちもまた智恵の言葉を守らねばなりません。私たちの子供が祈りをしてほしいなら、私たちも祈りをしなくてはなりません。万事について子供を正しく育てるなら、子供は生涯清い生活を送るにちがいありません。

またもし私たちが末日聖徒が当然もつはずの家庭をもつとするならば、しんげん第二十四章三節以下九節に誌してある聖句に従うがよいと思います。

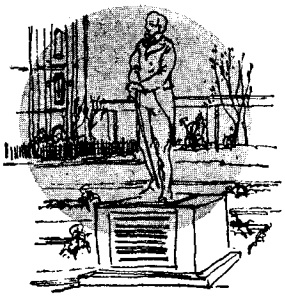
「家は智恵によりて建てられ、さとりによりて堅くせられ、また室は知識によりてさまざまの貴く美わしき宝にて充たされん。知恵ある者は強し、知識ある人は力をます。汝よき計りごとをもて戦をなせ。勝利は計る者の多きによる。知恵は高くして愚なる者の及ぶところにあらず。愚なる者は門にて口を開くことを得ず。悪を為さんと計る者はよこしまなる者と称う。愚なる者の計るところは罪なり。あざける者は人に憎まる」。

家庭は秩序のある場所、愛と一致のある場所、休息の場所、また信頼の場所、互いが信じ合う場所であります。また私たちの家庭は必ず「主の叢書」を備えましょう。それは聖書、モルモン経、教義と聖約、高価なる真珠のたった四冊であります。

ブリガムヤング大管長は「主の叢書」がなかったなら、私たちは暗黒の中を歩いているので、天の父なる神さまのみたまを受けることはないにちがいないということをはっきりなさいました。

「汝のする一切の働きについて主のみこころを伺え。そうすれば主は汝の為になる善い誡めを与えたもう。眠っている間も主が見守りたもうよう夜寝る時には自分の身を主に任せて寝よ。そして朝起きる時には神に感謝する念を胸に満せ。このようにすれば終りの日に高く挙げられる」（アルマ書三十七〇三十七）。

天にまします父なる神さまが、私たちをひきつづきおめぐみ下さいまして、すべての事に導きを与えたもうようお祈りいたします。



〈扶助協会特集　Ⅲ〉

夫に対する妻の責任

松川リツ
（新潟支部）

これが私に与えられたお話の題でありますが、もちろん一般の家庭というよりはモルモンの家庭に於ける立場からの妻の自分自身とそして夫に対しての責任について話しなさいということであると思います。

しかし、正直に言って、このようなテーマを持って皆様の前に立つということには多少の恥かしさを感じない訳には参りません。

結婚して未だ幾日も経ず、妻という自覚にも乏しく、想像以上に厳しい現実の生活の中にあって、唯戸迷う事の多い日々を温かい夫の協力によって、ようやく支えられているような私自身の現状であるからです。

しかし、このような現在に安んじていてよいとは決して思っておりませんし一日も早くモルモンの家庭の妻として誇り得る様な営みを持ちたいといつも心から願っております。

初めに妻の自分自身に対する責任というものに触れてみたいと思います。これは人間として生きる凡ての人々が個々に持つ共通した責任であり、それは同時に私達一人一人は神の子供である事を前提にしていえる責任です

私達は完全な救いということを望み、よくそれを口にしますが、私達を救いの頂点に導き、最高の栄に浴させてくれるものは他ならぬ、私達一人一人、自分自身の努力です。

私達が肉体を離れるとき、その私達のたましいについているものは、この地上のどの様なすばらしい宝石でもなく、又、富でもありません。それは神えの強い証と、英智と、そして又、自分の努力と働きとによって自ら得た発達などであり、その為に私達は現在あらゆる方法で成長し、進行をつづけてゆかねばならない責任を個々に持っている訳です。

末日聖徒である女性の凡てがイエス・キリストの教会と完全に一致した生活を送る様努力する責任があり、この教えを自分の導きとし又自己の力としなければならないのは当然のことです。又、その属する家庭にかぎりない愛と忍耐と寛容と親切とを注がねばなりません。そして、自分の内部にある最上のもの、即ち神への強い証と信仰に忠実であることに依って、自分自身をたかめ、導いてゆくようのぞまれます。

では次に妻の夫に対する責任について述べます。

もちろんこれは、夫が神権者である時ですけれど、この教会に於ては、妻たるものは夫が神権者としての義務を尽すにあたってこれを援けなければならないと言われております。創世記にみられるように主が最初の女をお創りになられた時、この女はその夫の〝助け手〟と呼ばれましたが、このことは、今も変らない責任を女性に課していると言えます。神権者が神権の務めを正しく行使するときに神様からの祝福があることを私達は信じておりますが、この祝福を同時にその伴侶である妻も受けるということを知らされています。しかし、当然それは妻が神権者である夫がその持っている神権の務めを尽す様に励ます責任を立派に果している場合にかぎって与えられる

恵みであって、妻が大切な自己の責任を自覚せず怠慢であるならばその祝福にあずかることはできないでしょう。

この教会の初期の時代に予言者ジョセフ・スミスは姉妹達に次のような訓戒を与えました。

〝この扶助協会は女性に向ってその夫に対してよく仕え、夫を優しさと愛情とを以って遇することを教えよ。男が困難に負けるとき心配と艱難によってどうしてよいかわからなくなっているとき、もしも議論と不平の代りに微笑を以て迎えられるならば、すなわち、おだやかに迎えられることができるならば、彼の心は鎮まり彼の感情は和らげられるに違いない。心が絶望に沈もうとするときその心は愛情と親切によってなぐさめを受なくてはならない〟となかなかむずかい訓戒ではありますけれど、常に強い愛と信仰と証とを持つことに依って、このジョセフ・スミスの期待に答えられる末日聖徒の女性になってゆきたいものと、念願しております。

これらの凡ての言葉を、イエス様の御名により申し上げました。アーメン

（十一月に行われた扶助協会特別プログラムのお話）

〈扶助協会特集　Ⅳ〉

子供に対する母親の責任

阿部てい
（新潟支部）

子供の母として賢い母でもなく十分な責任を果して居ない者でここでお話しするのは恥しいのですが、自分の子供が社会の中で正しく生き幸福である様にと願う母の在り方を話して見たいと思います。

人間としての基本的な人格……根本的な性格の造られるのは生れて間もなくから五六才の幼児期に造られるものと言われて居ります。ドイツ人宣教師のキュックリッヒ先生に……九月二十三日のテレビ放送「鐘はなる」にお出になって御存じの方もいらっしゃいましょうが……私は十年前にお話を始めてお聞し、その深い信仰と愛の心に動かされ「子供を育てる母の心はこのキリストの信仰にある」とはっきり知りました。それから求め続けて得られず三年前に始めてこの教会の宣教師によって信仰に導かれました。

ルカ伝の放とう息子のたとえ話しの章を引用して子供一人一人の生命と持てる個性の尊さを説き母の持つすべての時間と労働と金と心との半分を子供の為に犠牲しましょうと語られた先生の言葉をいつも思い出して居ります。「私のお母さんは私が八才の時亡くなりましたが其の幼い時代にたくさんの良い習慣と良いしつけをお母さんから頂きました。こうして今ある事も病身でいつも床の中にいらっしゃるあのお母さんの教えがあったからです。私は感謝してもし切れない程たくさんのものをお母さんから頂きました。」と幼児教育の大切さを説いて下さった時、母と子の美しさに涙が止まりませんでした。今も愛泉寮で弧児の良きママさんと慕われながら一生を幼児教育に捧げるお姿に母親の尊さを見るのでございます。

又心理学をなさる木田佳子先生が話して下ったお話中のに木田先生は御自分のお子さん

の生れる時、終戦後の、あの混乱した汚れた社会の中で「この子だけは汚ないものを知らない美しい心の持主に育てたい」と願って美しいものばかりを見せ意識してそうした環境をお造りになりました。心理学者ですから幼児心理にも訳して理想的な育児がなされたことと思います。其のお子さんは希望通り心の清らかな憎しみや怒りを知らないやさしい子供に育ちました。しかし先生は「私は失敗しました」とおっしゃいます。男の方ですから小学校も上級生になるとやさしく善良なだけでは友達と交って行き切れなく競争意識や、がんばりの出ないお子さんを前に学校の先生も心配して下さるとか、木田先生は「私がそうして育てたんだから誰に文句も言えないけれど困りますよ」と笑っていらっしゃいました。それ程困ったお子さんでは無いと思いますが幼児教育の大切さを良く知ることが出来ます。

子供の為に今日一日健康で楽しくと願う心と同じ様に、いいえそれ以上に成長して一人で考え一人で生活して行かれる社会の一員に育てることが母親の大切な仕事なのです。母の愛はともすると子供の我儘を許したい。過ちを見のがしたい心になり勝なのですが母親は勇気を出して教えて行きたいと思います。

こうした生活の中で自制心を育て正直、信頼、純潔生命の尊さ等々子供の成長に従って教えて行く事柄は、先生の講義の様でなく毎日の生活の中に織込まれて行かなければならないと思います。

これ等の事は一般的なことでしたが、モルモンの母として一番大切なことは何でしょうか?子供に神様を教え福音を説いてあげることです。真の神様を信じ戒めを素直に何の抵抗もなく受入れられる子供に育てられたらその子の一生はどんなに豊かになりますでしょう。

大人である私達でさえ目に見えぬものを信じ耳に聞えぬ御声を理解して戒めに従順であることはむつかしいことなのです。子供は考えるより先に形で受取り実感として受入れる者なのです霊的な雰囲気を教え永遠の生命を理解させるのは両親が殊に母親が自分の生活の中で経験し生活を通して導いてあげるのが最も良いことと思います。

私には四人の子供がありますが、同じ様にキリスト教幼稚園の保育を経て来ました。しかし上の三人は小学校に入るともう日曜学校に行くのを嫌がりすぐ止めてしまいました。今小学校一年生の娘だけは聖書とノートをかばんに入れて喜んで行って居ります。小さな力ですが母の信仰に助けられたものとうれしく、出来るなら私達の教会に教会堂が与えられ、子供のクラスが出来て母と子と一しょに来られたらどんなにうれしいことでしょう。

私達が今育て居るこの子供達も単なる自分の子供ではなく神様がこの世の摂理によって夫と妻とに与えられた一つの尊い生命であって、いつか再び神様にお返しする日が参ります。すなわち新しい家庭を造って独立する時に、正しく生活して行かれる信仰深い子供を送り出すことが出来たら、其の責任は果されるのです。この重い責任の為に神様の智恵と助けを頂かずして小さな母の力で何が出来ますでしょう。夫と妻とがどんなに愛し合って幸福であってもその生活の中に幼い命の与えられた時の幸福はもっと素晴しく幾倍かされ神様の豊かな恵みを知りますでしょう。この小さな命によって始めて完全な家庭が築かれ愛情も安らぎもすべてこの家庭の営みの中で味わい、より良い完成に近ずけるものと思います。

キュックリッヒ先生の様に不幸な子供の

(十九頁へつづく)

Genealogy

モルモン教と真言密教

（編集部員）　渡部正雄

本年六月号の聖徒の道に大塚兄弟が高橋五郎氏の著書廢児門教（モルモン教）を紹介したがその序文の中で同氏はモルモン教と真言密教は非常に似ており、この両者はどちらもその経典を天使から授けられたところに共通した特長があると述べている。先日私は坂井兄弟から借りた系図の本の一項目、くるす紋（クロス即ち十字架紋のことで久留子紋と書く）に就て読んでいる時面白い記事を発見した。大体この十字架紋は天文十八年七月二十二日（一五四九年八月十五日）フランシスコ・ザビエーが鹿児島に到着し伝道の結果、洗礼を授けるとともに十字架紋即ち久留子紋をつけるべく勤告してもたらされたものであった。鹿児島がザビエー最初の上陸地なので島津家の家紋である十字紋はザビエーによる十字架紋なりと見られて来た。ところが島津家の家伝には十字紋の使用のことを始祖豊後守忠久の時にあてである。なお蒙古襲来絵巻には、島津下野守久隆の十字紋の旗が立派に描かれていて耶蘇教伝来以前溯ること三百年も前のことで、かかる事実は先の島津家々紋を耶蘇教の十字架紋なりとする想像の当らないことを証明しているようである。ところが故テリザベス・ゴルドン夫人は研究の結果、次のように発表している。

「東洋にキリスト教の伝来したのは、ネストリア派にして、それは唐代のことである。日本の高僧空海は恰度この頃入唐している。のみならず、師の恵果阿闍梨を通じて、ネストリア僧侶にも接したといわれているになお十字架紋の日本伝来は、この唐代の時と思えるし、日本に於る十字紋の紋章は空海の手を経て、日本に伝えられたものと推せられる」

これで私は、以前から空海が支那でキリスト教を学び自分の教の中に取り入れていたと言う説がいくらか根拠あるものと感ぜられるのである。その真言の文字自体、聖書にも「太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき」とあり、更に「言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、

実に父の独子の栄光にして恩恵と真理とにて満てり」とある。

主イエスは言である。なれば真言は真にイエスであるとも言われよう。面白いことに空海がつくったいろは歌を次のように並べると主イエスが秘せられているのである。

い ろはにほへと
ち りぬるをわが
よ たれそつねな
ら むうゐのおく
や まけふこえて
あ さきゆめみし
ゑ ひもせす

とがなくてして死すである。やあゑもエホバの古語だそうだ。又イエス（いえす）と結んでいからえまでが三十三のキリストの生涯を三十四年目の死を更にす迄の十二は十二弟子を示しているとのこと。もし偶然だとしても言というものは誠に巧妙に構成されるものだ。空海が十字紋を携えて来たと同時にイエスの名をその歌に秘し福音を真言の教の中に蔵して、真言密教を説いたのではあるまいか。ともあれ私は曾て面白い経験をした。仙山線の愛子に蕃山という山があるがこの山は空海が、こもろうとしたが水が悪かったので高野山に行かれたそうで、今日もその中腹の森の中に真言密教のお寺があり貞雪尼と号するおばあさんの尼さんが修行しておられる。私が仙山線で始めてこの尼さんに逢ってトラクトを手渡したら、大変喜ばれて是非イエスさまのお話を聞きたいから一度寺に来て下さいと言って北仙台で私より一足先に下車したが私の窓まで戻って来て丁寧に見送って下さった。其後私が寺を訪ねると喜び迎えた老尼は「今迄私は東北大学や松島の瑞巌寺などで随分高僧や学者の話を聞いたがそれ程胸を打たれたことはなかった貴方のイエス様の話は不思議に私の胸を打ちます」と言われた。そしてこれは誰にも見せたことのない神から授かった秘宝であるとて空気を吸って生きているという白い玉の如きものを見せていただいたのである。磯原の皇太神を訪ねた時も御神体である神石（十月号に掲載）をマイクロフイルムにしたいので見せてもらい度いと願った処、巨磨氏は暫し黙禱していたが「不思議だ。貴方たちは余程正直な人たちですね。今迄如何なる人に頼まれてもお許しが出ずに見せたことがなかったが貴方たちに始めて神様のお許しが出た」と言って驚嘆しておられた。私はこれも老尼の時と同様、私たちの持っている神権の力によるものだあろうと、今更ながら尊いその偉力に感謝せずには居られなかったのであります。

（十七頁よりつづく）

母となっていて下さる方、この世の試練をきびしく受けて夫に先立たれた方々にも神様は必ず母としての特別な能力を与えて下さいます「母は強し」この言葉は神様の前に於て真実です。

至らぬ私にも難しい母の理想像を語りましたが愛する若い姉妹が良い家庭の中で尊い命を育て下さる為に努力して下さる様にと願います。最後にジョセフ・F・スミス大管長の言葉を残したいと思います。

「私達が主イエス・キリストを信じ又予言者ジョセフ・スミスが教会の基を置く為に神によって選ばれ召されたと信じて居る事を貴方々の子供に教えなさい。子供達に其の隣人監督、先生、老人、弱い人を救うように教えなさい。神の律法と国法を敬いその国に忠節をつくし正義と高潔と栄与に忠実であるよう、そしてそれを行うことによって世界のあらゆる男より女より勝れた男として女として成長するように教えなさい」すべてを主の御名によりて。アーメン

（十一月に行われた扶助協会特別プログラムのお話）

―新年随想―

若さについて

遠藤肇（編集部員）

「人は歳月とともに老いるかもしれないが、歳月とともに友情はこまやかになり、人生はいっそうこくがあり、豊かなものとなる」とマッケイ大管長は、一昨々年の誕生日を迎えた感慨の中で、こう述べた。私はこれを読んだとき、うらやましい気持ちとともに、大管長の中にみずみずしい若さが生きているのを感じた。そしてその若さにひかれ、私もそれを得たいと思った。

大管長はもう八十を半ば過ぎた。しかし高齢者にありがちな、疲れを背負ったような気力のない物腰は、大管長のどこにもみられない。それどころか、人を射るような、しかもやさしみをたたえた目や、強く張った胸などから、青年にもまけない意思の強さを感ずるのである。

二、三年前みた写真で、大管長が愛馬のたづなをとり、乗馬姿で、自然を背景にした写真があった。そこには人間としての魅力にあふれた大管長が、そのまま浮き彫りされ、大自然ととけ合って、崇高なものさえ感じたものだった。そして相好をくずしたあのしたしみやすい姿に、はちきれる若さをみて、私たちに必要なものは「これだ」と思ったのである

大管長はさらに「私は人生において、毎朝目がさめたら、その日の仕事を待ちもうけることができる以上に、満足を与えるものを知らない。また、まったくよくやったという感じをもって、一日の終わりに休むこと以上の満足があるのを知らない」という。このへんに大管長の若さのひけつがひそんでいる、と私は思う。そして大管長のみならず、人々がこのような気持ちで毎日を過したら、たとえ年老いたとしても、いつまでも若さにあふれていることであろう。なぜなら、自分のなすべき仕事があるという自覚が、人間生活を充実させ、過ぎゆく一刻々々が、意味とはげましにみち、さらに最善を尽くしたという満足感が、限りないやすらかさと謙虚さへ、私たちを導いてくれるものであるからだ。これこそ生きがいというものではなかろうか。未来に対して燃える理想をもち、それを実現しようと真剣に努力している人には、怠惰も、精神の鈍化も、影をひそめてしまうのである。

私たちが人生において、新奇なものに目をみはったり、ささいな物音をとらえて、喜びを感じたりできるのは、私たちがそれらの中にうずもれていた真実をさがしあてたからであり、もし私たちにそれを求める心がなかったとしたなら、私たちをたのしませたり、喜

ばせたりしたであろう真実というものは、小さいがゆえに見過ごされてしまうのである。自分の最善を尽くすということは、この小さな真実をさがし、とらえることでもあろう。私は昨年、アンドレ・モロウの「フレミングの生涯」を読んで、このことをつくづくと感じた。

〝偶然は用意のできている人間しか助けない〟とはパスツールのことばであるが、ペニシリンの発見者アレキサンダー・フレミングは、これを一生の友とした。以下、ある大学での彼の演説の一部を引用してみよう。

「偶然というものがこのように、あなた方の一生にどれだけ驚くべき影響をおよぼすかもしれないということです。もし私が、若い研究者の方になにか忠告をするとすれば、それは、普通ではないようにみえるものは、けっしてみのがさないということです。そのささいなできごとからなにも生まれないことがありますが、また、それが新発見のとびらを開くカギであることもあります。だからといって、なにも偶然が介入するのを、手をこまぬいて待つというのではありません。われわれは勉強し、それも一生懸命勉強し、われわれの専門に精進しておかねばなりません。しばしば引用される〝偶然は用意のできている人しか助けない〟というパスツールのことばは真実で、用意のできていない人間は、たとえ運命が救いの手をさしのべても、目にはいりません。要するに若い人々に対する私の忠告は、なにもないのであります。一生懸命たっぷり勉強しなさい……」

フレミングのこの人生哲学は、私たちに多くのことを示唆する。事実、真実というものは、見向きもされないような、わびしいところにあるものが多い。ちょうど磁石が砂の中から鉄粉を確実に吸いあげるように、自分のどうしても真実を求めてやまない心は、珠玉のはなつかすかな光たくを敏感にとらえ、真実であることをしかと見定めるのである。わびしいところでやっと見い出したものであるだけ、その人にはそれはもう絶対手ばなせない至宝となる。

自然の中に、人と人との関係に、私たちに生きがいを感じさせるものは少なくない。そのひとつを拾いあげて自分のものにするには、人生に対する凡庸でない態度が必要だと思う。凡庸でないとは、ひと口にいうと、うかうかと物ごとを見過さないという意味でもあり、ときにはきびしく、また寛容に、つねに愛情をこめて物ごとをみつめ、深くつきつ

めていくたゆまない研究の努力をも含めていうのである。それには「自分をありのまま眺めて、自分が現在もっているものによって最善を尽くし、それを受け入れる」ことがまず大事であろう。ものをみる新鮮な目と、豊かな感受性をもつことは、人生をたのしくし、生きがいあるものにし、その人に若さをまし加えていくのである。このような若さをもつ人に、私はだれであれ、心からのなつかしい信頼を寄せるのである。

この一月、アメリカの新大統領に就任するケネディ氏が、選挙期間中〝開拓者精神〟をもって、局面する国内、国際情勢に対処するよう、全米に呼びかけた。彼の勝利は〝若さと知性〟と報じられたが、それと同時に、アメリカ国民が、現在の自国の事態を認識して彼の〝辛苦〟の政策を受け入れ、それで力を尽くし盛り立てていこうというところに、国民全体に進取と若さがあふれているように感じられて、うらやましい限りである。

次は私の好きなことばだが、ジャン・ルイ・バロー(フランスの俳優、演出家、劇作家)が自著「私は演劇人である」の中で、演劇人とはどういう人かということについて、次のようにいっている。

「舞台のうえに再現させるすべての生命のために、いく平方メートルかの床板に愛情をもち、人間すべてに愛情をもっているものは、同じ愛情をもって、あらゆる職業、職業のあらゆる部門につかえ、それに付随するあらゆる苦労も甘受するのである。そういう人こそ演劇人とよばれる資格があるのである」——つまり演劇のあらゆる部門について、それが演劇のためになるならば、舞台のそうじも、俳優の看病も、税務署の役人に手紙を書くのも、計算も——あらゆることがすばらしい喜びとなる人間、それが演劇人だ、とバローはいうのである。

「演劇」ということばを「福音・教会・主のみ仕事」などに置きかえてみると、これはそっくり私たちにもあてはまる。

教会において自分の責任を果たすことも、兄弟、姉妹とまじわることも、十分の一や知恵のことばをいつどこにあっても守ることも、それだけでなく、社会においても、家庭においても、自分のなすことが天父のみさかえを現わし、自分を正しく成長させ、他人の幸福のためになるならば、どんなつらいことでも、苦しいことでも、あらゆることを喜びとして受け入れることのできる人間——そういう人間をめざして、私はつとめたいと思う。

未知のものに立ち向かうには勇気がいる。信仰は未知なるものに私たちをかり立てる力ではあるが、わずかの信仰の行ないにも、不安と苦痛を伴いがちだ。いやそれよりも、主のいましめは私たちからみれば、犠牲を伴って与えられているものが多い。だからこのいましめの中に喜びを見い出すのが困難なのであり、しかし見い出したときは、たとえようもなく大きいのである。私たちの働きのうしろに、悲しみのうしろに、苦しみのうしろにいつも変わらぬ公平な主の配慮のみ手が働いていることを信じよう。そして勇気をもって新しいこころみに立ち向かっていこうではないか。

小さなくり返しのようにみえる日々の努力の中に見い出される健康の祝福、労働の喜び、神に対する信仰、友人への愛などが、一歩ずつ確実に、私たちを理想、すなわち完全へと導いてくれるのである。そして、よりよき生活を夢み、神のごとき全きものをめざし私たちが心に描く人生それぞれの理想像の中にほおえむ永遠の若さこそ、同時に私たちの中にあって、よりよき善へ向って私たちを推進させる源泉となるのである。

光を再びうけた頃

═モルモン教会の日本伝道再開を顧みる═

高木冨五郎

一

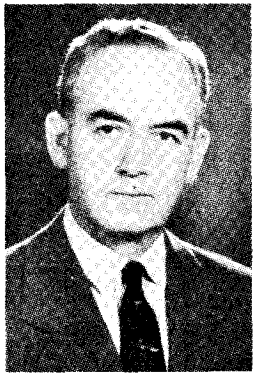
五年間の北支那生活から解放されて引揚げて来たのが一九四六年四月末であった。終戦直後の日本は見るかげもなくやつれて、国民は例外なく其の日の糧を求めるのに血眼になっている惨澹たる状態にあった。

職もなく、かつ大陸ぼけしてしまった私は唯食うことにのみ心を砕く有様で、形而上的なゆとりなど微塵もない一個の動物であって、そのためには僅かばかりの所有品――土地、ピアノ、椅子、テーブル、蔵書など――を片っ端から売り払って、食を得ることが生存のすべてであって何を考え、何を思うゆとりもなかった。どんな精神的なものも、況んや地上唯一と信じたはずのモルモン教会のことなど想起する余裕さえなかった。

ところが或る日、(一九四七、一一、二四)ハワイのモルモン教会福祉委員会から、突然一個の小包が私の宅へ届けられた。理由も何も考えずに、取るものも取りあえず小包を開けて見たら、中から出るわ出るわ、米の罐詰砂糖、キャンデーやら薬品、下着類から靴下手袋など二十点余り、眼の前え広げてから家族とともに、饑えたる小羊が素晴らしい食物

にありついたように、ただ呆然とそれを眺めるばかりであった。実際当時の日本は極度な衣食困窮に沈りんして国民はことごとく生きるための努力さえも失ったかのように滅入っていた時であるから、私は、この天から降って来た恵みの数々に涙ぐまれるほどの感謝を覚えずにおられませんでした。

そして幾度も小包の送り主の名を読んで見ては『ああそうだ、これは遙か海のかなたなるハワイに在る、教会の兄弟姉妹たちの温かい愛の結晶だ』と気がつくと、私は末日聖徒イエス・キリスト教会の会員であったことに改めて思考を統一せずにはおられませんでした。そしてそれから一九四八年一月三十一日にユタ州デルタの D. V. Ekstrom 兄弟からの小包を受取るまで、ソルト・レーク市から二回で三個、ホノルルから二回で二個の小包を受取ったことになり、いまだ見ざる兄弟姉妹たちの尽きせぬ愛情に心からなる感謝の意を表さざるを得なかったのでした。



クリソールド部長

一

こうした出来事のあった前後から、「日本伝道が再開される」との吉報が耳に入るようになり、恰かも進駐米軍内の聖徒たちが丸ノ内の明治生命館で集会を催していることを奈良兄弟から通知をうけたので、一度そこへ出席して、米軍の兄弟姉妹に会って、昔の日本のモルモンの状態を物語ったことがある。

『日本伝道は何時から再開されるか』という私たちのささやかな希望が達成されそうな周囲の雰囲気を感じとると、私たちの心も漸やく平常に復帰して、「モルモン教会」「末日教会」への心のよみがえりを強め始めたもので、古い兄弟姉妹が集る機会があると、そこで希望を語り合うのが何よりの楽しみであった。

一九四八年二月三日、私の宅へ一通の封書がハワイから届いた。この航空便はホノルルにある末日聖徒イエス・キリスト教会日本伝道部事務所差出しのもので、中には次のような書簡が邦文でタイプされてあった。

新年の御慶びを申上げ併せて御貴殿の御健康と御幸福を祈り上げます。

御承知のこととは存じますが、わが末日聖徒イエス・キリスト教会は日本に伝道部を再開致します。不肖私が日本伝道部長に任命され伝道部の開設及び支部その他の創立にあたります。

只今、当局に請願中の許可書が下附に相成り来る二月の中頃にホノルルを出帆いたす予定であります。

日本伝道部の本部は只今の予定では東京都又は横浜に設置することと思います。私が到着いたしまして適当な設備が出来ましたら、伝道部本部所を新聞紙上に発表いたします。そして到着後出来得るだけ早く信者の皆様方を訪問いたしたいと思います。

只今日本では物資や他の必需品が御不自由のことと承り、もし食料品、薬品又は古着等が御入用の節は御躊躇なく飛行便でお知らせ下さいますれば我が教会の慈善会の援助をお願いしたいと思います。

近い中に皆様に直接御挨拶の出来得ることを期待しつつ皆様の御健康と福祉増進の豊なる恵みをあたえられんことを神にお祈りします。

一九四八年一月十三日
布哇ホノルル市マーチャント街二三九
末日聖徒イエス・キリスト教会
日本伝道部長　イ・エル・クリソールド

三

クリソールド伝道部長は予定通り三月上旬来朝して本部建設に没頭中ということを伝聞したが、まだ会う機会がなかった。三月に入ってから五反田の林氏宅で日曜学校を開いていると聞いたので、私は三月二十一日午前十時、浦和の自宅から一時間二十分の行程のある五反田へ出席して初めてクリソールド伝道部長と会う機会を得た。その風貌態度ともに優れた方で、再開された日本伝道部の前途は為めに限りない曙光に照らされたとの感を深くしたことである。

六月二日（水）の午後のこと、クリソールド伝道部長と同道で品川の日米文化学院へ行ったことがある。たまたま院長が伝道部長の知友であったばかりでなく、私にも在米当時知り合った先輩であったので其の日の訪問は大変意義あるものとなり、講堂へ全学生を集めて試みた伝道部長のお話は創世記以来人類の最も望むもの、それは真実であり隣人愛であると述べる節は、まことに熱のこもった力強いものであったことを今も記憶を新たにするものがある。

七月二十日附でクリソールド伝道部長からうれしい便りを受け取った。その時は既に伝道本部は現在の東京都港区麻布広尾町十四番地へ、焼けた建物を買って改修したばかりの頃であった。その書簡には次のように認めてあった。

この教会の伝道部再開についてホノルルから手紙を差上げてからもう半年近くになります。はじめ私は三月六日、日本に着いてから直ぐ皆さんにお目にかかりたいと思っておりました。しかし日本に本部と、適当な宿舎が出来るまでは多数の宣教師をつれて来ることは出来ないということがわかりましたので、すぐ本部の用意にかかり、ついに港区麻布の有栖川公園の前に一つの半焼の建物を見出しました。

この家の買入交渉のためには数週間かかり、ただちに修理大工事にとりかかりました。建築業者は只今全力をつくしており、九月一日までに其の仕事を完成させようとして居ります。工事が始まってから私は毎日現場へ出向いて居り、これが出来上るまでは其の場を離れることが出来ません。本部が出来れば直ちに東京以外の会員の皆様をお尋ねしたいと思っています。

六月二十六日、五人の宣教師が横浜に着きました。ユタよりのH・T・プライス、W・マクダニエル、P・アンドラス、R・プライス長老、それにイリノイ州シカゴ市からのK・オカウチ長老であります。これらの方々は横浜と立川で働らくことになっております。

来月はまた新らしい宣教師が着任するはずで、今年の末には二十五人から三十人にしたいと思っております。そうなれば、これらの宣教師が会員の居られる各地方で働らくことになりましょう。どうぞもう少し御辛棒下さい。われわれはこの伝道部閉鎖以来いなかったことの埋め合せをするつもりです。伝道本部を開くにあたりまして、初めの仕事の一つは日本のすべての会員の完全な記録を作ることであります。どうぞすぐに会員であるあなたと、あなたの御家族の姓名、住所、年令、バプテスマを受けた時をお知らせ下さい。それから他の会員の姓名住所をお知らせ下さい。もし伝道部閉鎖後、逝去された会員を御存じでしたら、そ

の姓名、住所と逝去年月日をお知らせ下さい。出来得る限り早くこれらの報告をいただきたいと思います。

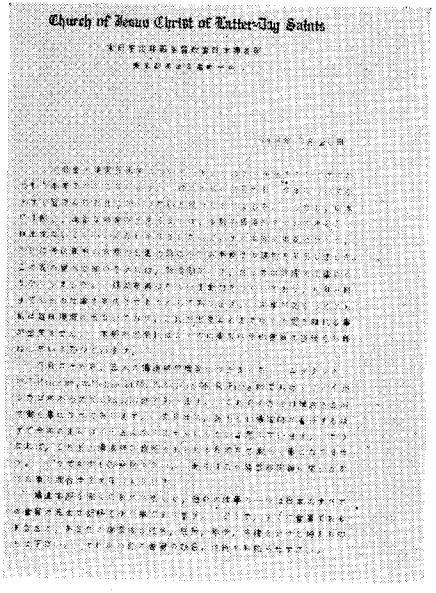
ホノルルからの私どもの手紙にこたえて衣類その他の御希望をうかがいましたが、これらの品物のある物は近日中に東京からお送りすることになっております。まだ全部の品物はそろっておりませんが……。

神は良い本部を東京に見出すための宣教師の努力を祝福しました。私たちの仕事を助けるためかずかずの友人が与えられました。われわれはこれが日本における大きな伝道事業のはじまりであると信じます。われわれは永年の間、この教会に忠実であった会員の信仰と熱意に対して神に感謝します。末日聖徒イエス・キリスト教会日本伝道部再開のためわれわれが皆力を合せている時、あなた方会員こそ、われわれを導くものであり又、力づけるものであると信じます。皆様の健康と幸福をいのりつつ

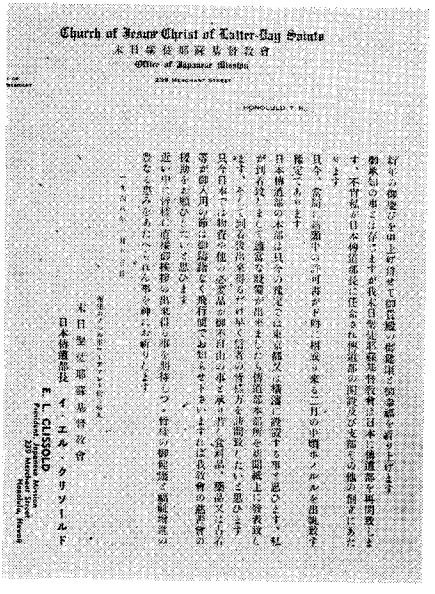
日本伝道部長

イ・エル・クリソールド

後列左より岡内，アンドラス，マックダニエル
前列左よりレイ・プライス，ワーカー，テッドプライス各宣教師



Church of Jesus Christ of Latter-Day Saints



Church of Jesus Christ of Latter-Day Saints
末日聖徒耶蘇基督教會
Office of Japanese Mission

HONOLULU T. H.

末日聖徒耶蘇基督教會
日本傳道部長　イ・エル・クリソールド
E. L. CLISSOLD
President Japanese Mission
Zion's Church Headquarters, Honolulu, Hawaii

クリソード伝道部長の手紙（伝道本部保存のコピーより）

くの歳月を経た後ペテロはそれを覚えて、彼はその教会への第二の書簡の中にこれを引用して居ります。それは私にとって常に興味あることです。ペテロは言いました。

〝我らは我らの主イエス・キリストの能力と来りたまふ事とを汝らに告ぐるに、巧なる作語を用ひざりき、我らは親しくその稜威を見し者なり〟（ペテロ後書一・一六）

この親しく見たと言う言葉を覚えて下さい。この人たちは欺かれたのではありません。彼等は知っているから語ったのであります。彼等は現実に、この世で生活していると同様に、イエスがキリストであり、死後に生命の実在することをはっきりと知っているのです。ペテロは更に述べて居ります。

〝いとも貴き栄光の中より声出でて『こは我が愛しむ子なり、我これを悦ぶ』と言ひ給へるとき、主は父なる神より尊貴と栄光とを受け給へり。我らも彼と共に聖なる山に在りしとき、天より出づるこの声をきけり〟

（ペテロ後書一・一七―一八）

何と大いなる強い証ではありませんか、皆さん!! 私たちは何の疑いも、あやまりもなく、主イエス・キリストの指導精神を受けとることが出来るのです。私は歴史中に於てイエス・キリストを除いて真に世を導く人を知りません。彼は真に世を導いた人であります。何となれば彼は次のように言って居ります。

〝我には亦この檻のものならぬ他の羊あり、之をも導かざるを得ず、彼らは我が声をきかん、遂に一つの群ひとりの牧者となるべし〟

（ヨハネ伝一〇・一六）

当然に彼はこの世を彼と神の共に住まう処へ導くべき資格を持った唯一の牧者たるべき者であります。

彼は又他の場合に次のように言いました。

〝凡て労する者、重荷を負ふ者、われに来れ、われ汝らを休ません。我は柔和にして心卑ければ、我が軛を負ひて我に学べ、さらば霊魂は休息を得ん。わが軛は易く、わが荷は軽ければなり〟

（マタイ伝一一・二八―三〇）

彼はそこで、この世に出て福音を説き、あらゆる地方の人々の思想と習慣を改革し、人々の心に自由と民主主義の種をうえつけた十二人の弟子たちにすすめて言った。

〝全世界を巡りて凡ての造られしものに福音を宣伝へよ〟

（マルコ伝一六・一五）

私たちは皆この大いなる勧告をなしとげるべく自分に与えられた分担を遂行しようではありませんか。何となれば私たちは彼等が十九世紀以前になしたと同じことをなし、救いえの神の権力である同じ福音を説いているからであります。私はこれらをイエス・キリストの御名によって証し致します。アーメン

私の改宗

吉田道乃
（松本支部）

今日も青木姉妹の家で姉妹の弾くオルガンに合せ、二人の好きな讃美歌百六十四番を歌いながら、モルモンとして生きられる今日の私を心から神様に感謝致しました。

一九五九年十二月十二日、私は一生涯忘れることが出来ません。罪深い愚かな無智な私をも神は愛し、眠っていた私の霊を呼びさましてくださいました。私は愚かゆえ苦しみを味うまで愚かさと罪深さを悟ることが出来なかったのです。母は仏教徒の家に育ち、今もその心を変えませんが、子供の時、私たち兄弟を父亡き後、正しく生きなさいと導いてくれました。でも私は真剣に神様について考えたのは昨年の夏頃からでした。母と一諸に寺に行ったり、友人の勧める創価学会の話しにも耳をかたむけました。でも私が少女の頃、日曜学校で教わったイエス様のことと美しい讃美歌を、もう一度聞きたいと思いました。でもどの教会へ行こうか迷い、自分から勇気を出して教会の門に入ろうとせず、自分に対してとすべてに対して失望とあきらめを持ち始め、せっかく芽えた信仰の芽さえも自分で枯らさせようとしていた時、十一月三日神は罪深い弱い私を哀み給い、二人の方を使わしてくださいました。

熱心な長老に導かれ初めて教会に行きました時、渡部兄弟が来松されモルモンの開拓者のお話しを聞いた時、感動と共に自分の求めていた教会はこれであると覚りました。始めのうちはモルモン経を読んでも、一方の心がそれを否定します。そんな時一心に祈りました。同じ句を繰返し読み進むうちに、自分が許されがたい罪人であることを知りました。バプテスマを受ける前、長老は私の心を見抜いたと信じます。「貴女は今不和の人がおりましたらバプテスマの前に和解してください」と。私には、ある人々をうらみ、ある人を嫌う心があり、自分自身もそんな心を悲しく思っておりながら、悔い改めることが出来なかったのです。

その夜休む前、自分の思い出せる罪の全部を神に告白した時、後悔の涙がとめどなく流れ、許しを願った後、今迄に受けたことのない安らぎに満されました。憎しみを持っていた人々に手紙を通してお詫びを致しました。主がそのように導かれたと信じます。主は「貴女の罪が許されたいならば、人の罪をも許しなさい」と申されました。憎しみや、妬みや、恕りのない生活がいかに平和に満されるものであるかを私は知りました。数日後Hさんが癌で近く入院することを知りましたので、家を訪れ神様に導かれたことを申しました時、Hさんは神を否定し、「この世はお金だと思うが、でも私は罪深い者であり、もし死んで許されるなら私は死んでもよい」と、語ってくれました。入院した時は、すでに手遅れでした。私はその人と和解出来たことを感謝しております。

Hさんの所へ行くととても喜んでくださり、附添のお母様に、かすかな声で「この人はお茶を飲まないからお茶はいけない」と申してくれました。死が近づいた時、本人もそれを感じたのでしょう。私が「貴女がこの世を去っても私達の罪を救ってくれ

る方は神の子キリストであると信じてくださるならば、神はきっと貴女を導き喜びを得ると、私は信じます。どうぞ貴女も信じてください。私の話すことが分ってくださいますか?」とたずねた時、目をとじてうなずき、口を動かしましたが、聞き取ることは出来ませんでした。

十二月十四日病人の横で、Hさんと私の罪をも許し、彼女を霊界にてお導きくださいと一生懸命祈った時、苦しがっていた病人の死顔は今迄にない美しいほほえみで生きている人の様でした。一人の死に直面した私は、ただ神の深い愛とイエスはキリストであることを確信しました。教義と聖約十六章十節に「人の値は神の前に大いなることを憶えよ」と記されておりますが、それを知りました。また一人の人間が生れて死ぬ迄に多くの人々の助けを必要とすることを、体験を通して良く知ることが出来ました。私はHさんも霊界で神様の福音を感謝していられることと信じております。

神は私が、迷い、導きと答えをも願い、祈る時、信仰の弱い私には、直接には、お答えくださらなくとも神権者達のある方を通して答えを誡めを与えてくださることを心から感謝致しております。バプテスマの後、教義と聖約を読むことにより、モルモンとしていかにすべきかを知り、まだまだ悔い改めが足りないことを知りました。罪を知れば知るほどキリストの愛を感謝せずにはおられません。キリストはこの世においての生活の方法を教え示し給いました。イエスの教えは人格を人生を変えてくれます。

私は心から聖典を読むことと祈ることにより神を知ることが出来、それらを行おうと努力する時、私たちは今迄より進歩することが出来ると信じております。また神は私たちに出来ないことは決してお命じにならず、私たちが誡めを守ろうと努力する時、必ず助けてくださることを信じています。ある時は試練に合います。その時私はヤコブの言葉一章二節から五節を心に思い出します。この教会に導かれましたことを心から感謝致し、神は私たちの父であり、イエスは救主であり、聖霊は真理を教える方であり、ジョセフ・スミスは神の啓示と神権により、この教会を設立しましたことを証致します。これらの言葉のすべてをキリストの御名により申し上げます。アーメン。

私のひとりごと

佐伯忠晴
（聖徒の道編集員）

愛する母があり父があって私は生れた。愛する兄弟、姉妹があり私は教会にある。これは全て真実の社会の姿であろう。真実の社会に生きようと思うなら、義務や困難に背をむけてはならない。即ち、義務の遂行と責任の尊重を重んじねばならないだろう。では、私たちの義務とは何で、責任とは何だろう……。別に何ものでもない。勉強、（労働）隣人愛（神の愛）この二つの言葉に尽きる。これこそ！私たちの義務であり、責任ではなかろうか。

しかしこれほどむずかしい努めはない。私は続行、頑張り、意志etcの言葉が浮んでくる。何はともあれ、地味な意欲で、「step by step」前進するのみであろう。毎日が出発線でありたい。スタート・ラインに並んだ走者なら誰でも希望と意欲を持っているだろう。私たちの生活は毎日が出発でありたい。その為には、祈りで始まり祈りで終るはずである。

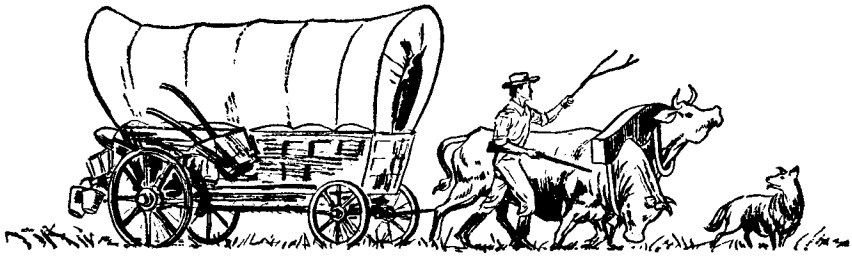
（学生）

＜求道者のためのよみもの＞

ユタ物語

（4）

リーヴアイ・エドガー・ヤング
（七十人会最高評議員会々長）



インデアン人たちも又、多くの不安をもたらしたのであった。彼らは必ずしも常に友好的でなく、夜には多くの小さな開拓村では、その家屋や家畜を山間の原住民の侵略から守る為に番をせねばならなかった。それにもかかわらず早期のユタの開拓者たちのインデアン人に対する政策はペンシルヴェニヤに於けるウイリヤム・ペンのそれに比べられるものであった。インデアン人たちは非常によく取扱われていたのであった。時々或種の問題が生じたことは事実であるが、通常これらは赤い人と白人との間で平和的に処置されていた。ブリガム・ヤングは〝インデアン人と戦うよりも彼らを養った方がよい〟という政策をとった。そして彼のこの理想は最初から出来るだけ実施されて来たのである。最初の数年間、ユッテ族は開拓者たちの処へ食糧と衣類を求めて来たのであるが、それらは能う限りに於て提供されたのであった。けれども食糧は開拓民の間でも不足し、常にインデアン人たちの要求に応ずることは不可能であった。ワシヤキの首領がかって合衆国のインデアン人弁務官にワサチ山間に住む開拓者たちは永久に彼らの、よい狩猟地を共有することが出来ると告げた。彼は「何となれば彼らは

我らに挑戦せず却って我らを養い援けるからである」と言った。

けれども間もなく問題が生じ、一八五二年から一八五四年にかけてウォルカー首領が、その領域内の各地で白人と戦った。白人たちが彼らの狩猟地に侵入したことがインデアン人たちを刺戟して戦いに導いたのであった。その結果、領域内の南部の多くの開拓者たちが数ケ月間も包囲され、とぢこめられたのであった。サンピート県のスプリング市という小さな町は、一夜の内にユッテ族の一味によって滅されてしまったのである。彼らは家や、納屋や乾草堆を焼き払い、牛馬、豚、羊などを追い散らし、鶏なども殺した。人々は非常な災害を受けた。けれども遂に白人とインデアン人は平和を結ぶに至った。それは一八五四年のことであった。ヤング知事は当時のインデアン人たちの代行者であり、その民の一行を伴ってインデアン人部落に赴き、個人的に折衝したのであった。開拓者たちは、贈物を与え、インデアン人たちは白人の善意を確認したのであった。翌年南部の多くの土地が契約によってヤング知事に移され、彼はその代償としてベーコンやメリケン粉や牛や豚を提供した。ユタの開拓者たちは常にヤング知事に、インデアン人たちの性質を理解し、彼らに対し誠実であるようにすすめられていたのである。或時彼は言った。

〝誰でもインデアン人を欺いた者は、白人を欺いた以上に処置される。インデアン人たちは盗んだり又はその敵を殺したりすることを罪と思っていない。何となれば彼らは子供の時から、それが何でもないばかりか、却って勇敗な行為であると教えられて来たからである。白人たちはそうではない。白人は小さい時から盗んではならないと、又自己防禦の場合を除いて殺してはならないと教えられて来たのである。ウォルカーはその神に犠牲を捧げる迄は白人を殺したり、カリフォルニヤに盗みに出かけたりしなかった。そこで彼は正しいことをしていると思っていた。南部の開拓者たちとの戦いの時に、そのようなことを行わなかったのは、彼がその神に答えられなかったからである。貴方たち兄弟らよ。彼らに対する怒りを退けて、彼らを殺害しようとすることを止めなさい。〟

赤い人たちに就ての最も顕著な他の声明はヤング知事によって一八五六年になされた。その中で彼は言っている。

〝現在放置されている多くの土地を、開墾し利用する為にインデアン人に与えよ。貧しいインデアン人たちに農耕技術を教え、広く大地から彼等の生活のかてを生産させ、投機的な狩猟に頼ることなく農業に従事し家畜を飼育する平和産業を営むようにさせよ。私が今迄しばしば言って来たし、今も又言うが、平和な友好的な態度を以て彼等に対し、情けある人道的な扱いをなせ。かくしてはじめて彼等は、その低級な状態から救われて知的な文明生活に浴することが出来るのである〟

一八六六年にブラック・ホークの戦争として知られている最も烈しいインデアン人との戦が起った。それは全領地に拡大した。これは合衆国政府がインデアン人たちを保留地区に封じ込もうとしたことから起った。一人の大首領であったブラック・ホークが、彼らがその土地に対する権利を放棄して大嘆の嫌う〝大農場の奴隷〟となるべく移動させられる政府の取扱を拒絶したのであった。そして戦争となった。インデアン人の略奪は広がり町々は破壊され開拓民は殺害された。そして強暴な抵抗の後にインデアン人たちは始めて屈したのであった。平和が訪れた時、政府はダチン要塞を建て白人を保護し、インデアン人たちを番する為に保留地区の中央に歩哨所を

立てたのである。

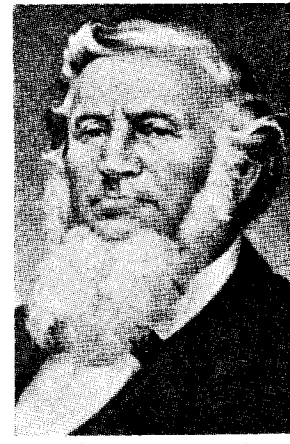
アメリカに来てインデアン人を教え導き、すべての正義とキリスト教の愛を以て彼らを遇したジェスイット派や、クエカー派と同様に、ユタの開拓者たちは、この西部の原住民に尊敬の念を以て対処したのであった。ユタの開拓者たちはインデアン人たちを農場に導いて彼らに鋤や馬を与えたのであった。今日北部ユタに於て開拓者たちによって建てられた、良い学校は白人の文明や芸術をユッテにもたらす手段となっている。

○学校の設立

ユタに於ける最初の学校は、開拓者たちがソルト・レーク盆地に到着してからわずか三ケ月目に開かれたのである。最初の先生は、マリヤ・ジエン・ディルウォースで彼女は一八四七年にテキストや多くのよい物語集などを携えて広原を横断して来たのであった。学校の建物は十月にソルト・レーク市の旧要塞に立てられたインデアン人の小屋のような形をした旧軍用天幕であった。最初の冬に三つの学校が維持され多数の少年少女がディルウォース嬢の教育の下に集って来たのであった

これが今日のユタの素晴らしい学校制度の始まりである。新開拓地の婦人たちは、その子供たちに出来るだけの便益を提供しようとして代る代る教育を担当したのであった。一八五〇年迄に、すべての町及び行政上或は宗教上の一単位として存在している処に、よい学校が開設されたのであった。

一八五二年にユタ領土の最初の学校規則が議会を通過し、直に知事によって裁可されたのであった。それはすべての市民単位地区に学校を設立するように定めてある。すべての町は、よい学校を維持し、デゼレット大学の総長及び評議員会にその進歩の状況を報告せねばならない。その当時、よい先生たちが傭われた。実際に於て、我々は教育のある人々がカリフォルニヤの金鉱への途上に於て、このユタで冬を過し、その学校によい職場を見出したという記録を見るのである。移民たちは彼らの書物を学校の図書室に寄贈し、すべての人がそれを無料で読み楽しむことが出来たのである。



＜ブリガム・ヤング＞

一八五〇年にミズリー河以西で最初の大学が設立された。それはその年の十一月に、良い生徒たちの登録を以て開校し、この学校は今日全合衆国にその名の知れわたったユタ大学に成長したのであった。開拓者たちが如何に教育に力を入れていたかは、ブリガム・ヤング及びデゼレット大学評議員会の発出した回章を見れば想像出来る。その一部に次のように記されてある。

〝デゼレット州の市民は、ソルト・レーク市に大学を設立した。総長と評議員会はその管理に指定されたので次のような回章を配布する。大学は神の摂理によって生れ、成長すべく運命づけられている。教課又はその他の方法によって備えられた教育はすべての階層、あらゆる信仰、政党、社会団体、民族を問わず均しく庶民に提供されるのである。教育はこの民のすべての組織内に浸透し、大衆をその能力の最大限迄、教育向上させているのである。そして世界でも無比の教育施設が完備しているのである。又ロンドン、エジンバ

ラ、パリー、ローマ、コペンハーゲン及びカルカッタ各地の大学の教授たちと通信連絡を保っているのである。

回章は更に、すべての科学、文学、歴史及び語学は教授されるべきであり、又如何なる人と雖も金銭不足の理由により大学の提供する便益を拒否される者はないであろうと述べている。一八五〇年の大学総長の報告に次のように述べている。

〝この冬から全市にわたって普通教育が実施され、全市を通じての総体的な学校体系を考慮して、各ワード部に於て学校を建てるように計画されている。一つの計画は既に提出された。それは三つの大きな教室と講堂と個人読書室と図書室から成っている。両親又は高等学校は十一月十一日から始まる。料金はスペンサー総長の指令により一学期間三十シリングとする。教師たちは、この学校に連絡を取り、ここで全市を通じての統一した学校経営のシステムが定められた。ウッドラフ長老は殆ど二噸近くの書籍を携えて来た。大学の為に科学的な機械及び其の他器具の政府からの寄贈があった。同様に図書室には価値ある書籍が贈られた。

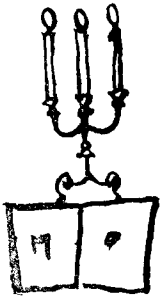
（十頁、モルモンの教義よりつづく）

生涯変ることなく忠実に守り通す時には、次のような祝福が約束されてある。すなわち「彼らは神々となるべし。彼らは終りなければなり。それより彼らはすべてのものの上にあらん。すべてのもの彼らに従えばり。それより、彼らは神々とならん。彼らはすべての権能を有し、諸天使彼らに従えばなり」と（「教義と聖約」百三十二〇二十）。この諸天使とは何者であるか。それは神の律法を守らなかった者たちである。「誠にまことにわれ汝らに告ぐ、汝らわが律法を守るにあらざればこの光栄に達するを得ず」（「教義と聖約」百三十二〇二十一）。「わが律法」とは何であるか。それは「新しく且つ永遠の誓約」すなわちすべての誓約である。「およそ最高の栄に進むを得て生命をつずくるに至る門は狭く、道は細くしてこれを見出す者は少し」（「教義と誓約」百三十二〇二十二）。「されど、もし汝らこの世に於てわれを受け入れなば、汝らわれを知りて最高の栄に進むを得ん、すなわちわが在るところに汝らもまた在らん。こは永遠の生命なり」（教義と聖約」百三十二〇二十三・二十四）。ここに於て「永遠の生命」の真義が何ら包みかくすことなくまる出しに示してある。貴いかな、貴いかな。

四、忠実な独身の女性

独身である忠実な姉妹たちよ、怖れるに当らない。主なる神の賜う最高の祝福に与れないかと怖れる必要はない。もしも心の中で福音が真実であることを確く信じ、神殿に於て義しい儀式と「結び固め」に与りたいことを心中深く念じているならば、今実現ができなくとも、その信仰と熱望とに対して主は最高の祝福を賜うことを惜しみたまわないにちがいない。正しく受け入れることのできない申出でをことわることに対して主は罪ありとしたまわないからである。

（「救いの教義」第二巻七十六頁、ジョセフ・フィールディング・スミス長老の言葉参照。）



末日聖徒イエス・キリスト教会歴史粋（十三）

ジョセフ・フィールディング・スミス著

第二部　時満ちたる神権時代の開始

第九章　ジョセフ・スミス、モルモン経を授かる――神権の回復

（千八百二十七―千八百二十九年）

一、ジョセフ、モルモン経を授かる（つづき）。天使モロナイは今一度ジョセフに彼の守るべき義務を伝え、それから次のように言って今や彼の双肩にかかろうとしている大きな責任を彼の心に強く感じさせた。

「今や汝はその記録を汝の手中に得たり。されど汝は一箇の人間に過ぎず、されば汝油断なく汝の信頼に対して忠実ならざるべからず。さもなくんば汝は悪人たちに負かさるべし。何とならば、悪人たちはその記録を汝の手より奪いとるあらゆる策と方法とをめぐらすべきが故なり。もし汝絶えず用心せずば悪人たちは成功すべし。かの記録わが手の中にある間はわれそれを保つを得て何人も取り去る力なかりき。されど今やそれを汝の手に渡す。用心せよ。而して汝のやり方によく気をつけよ。さらば汝はそれを保つ力を得ん」。

モロナイは更に、もしもジョセフがその記録を手放したり自分の義務をおろそかにするならば彼は絶ち切られぞ、しかし忠実に忍耐してその記録を守るならば、天使がそれを取りに来て再びその手に保管するまで彼は守られるにちがいないと言った。

二、悪人たちの陰謀失敗する。　間もなくジョセフは彼にこぞって反対した暗黒の力について、また彼を殺してあの記録を手に入れようとする質の悪い人々の欲望について天使の告げた警告が全く本当であることを知った。その記録を彼の手から取ろうとする悪人たちの奮闘努力に押され

て記録はほとんど彼の手から奪われようとした。暗黒の力が企てることのできるありとあらゆるたくらみと新しい工夫とが用いられた。まじない師や「のぞき石」をもっている易者たちやその他の方法が使われた。暴徒たちが集ってスミス家の家敷内を探し、家の中へ押し入って隅から隅まで探しさえした。法律にかこつけて捜索が行われた。こういうわけで、その記録を奇妙な場所へ隠すことが折々必要になった。それは一度森の中にある木の洞穴に隠された。ある時は家の中の炉石の下に、またある時は近くの店の床下に隠された。そして予言者ジョセフがペンシルベニヤへ出発した時に、彼はその記録を豆の入った樽の中に隠して

<モロナイ天使とジョセフ・スミス>

おいた。一度探されたがそれは発見されなかった。予言者が働きをする時主が彼と共に在したから暗黒の力は征服されて何の効もなかった。

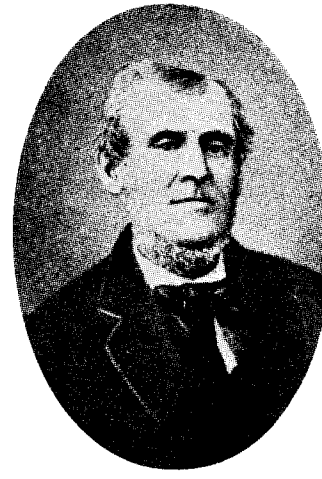
三、マーテン・ハリス。　マンチェスターの町では反対が非常に激しくなってきたから、予言者は別の場所に避け所を求めた。彼は妻の両親からペンシルベニヤ州ハーモニーにある両親の宅へ来るように招きを受けたので、その招きを受け入れてそこへ行く支度をした。彼はこの時非常に貧しかったので、自分の借金を片附けて旅をするのに必要な金を手に入れるのにやや困難を感じた。

この窮迫の中で、また迫害を受けている最中に、彼はニューヨーク州パルマイラの住人マーテン・ハリスの友情を受けた。ジョセフとその妻の兄弟アルヴァ・ヘールとは或る用事を調えるためにパルマイラへ行っていたが、そこに居たうちにマーテン・ハリスが彼と近しくなって、彼は「今日は、ジョセフさん。さあ五十ドルあります。これで主の仕事をなさるようにあなたにさしあげます。いや、主の仕事のために主へさしあげるのです」と言った。

ジョセフはその金を受け取って覚え書きをさしあげたいと言った。アルヴァ・ヘールもまた署名をすることに同意したが、マーテン・ハリスはその覚え書きを受け取ることをことわった。この金で予言者はハーモニーへ旅行することができ、彼はそこで安息所を見出した。

四、ペンシルベニヤへ移る。この事があってから間もなく、ジョセフはペンシルベニヤ州サスケハナ郡ハーモニーにあるアイザック・ヘール家へ移った。その後ジョセフはヘール氏から小さな農場を買い求めてそこへ移り住んだ。ここで彼はかなり平和の中に、あの金版の上に刻んである文字を写す仕事を始めた。その記録はユダヤ人の学問とエジプト人の言葉(象形文学)から成っていた。彼はまた「ウリムとトミム」によってその中のいくらかを飜訳した。これは千八百二十七年の十二月から翌年の二月に至る間に行われた。千八百二十八年の二月にマーテン・ハリスがジョセフ・スミスを訪れにやって来た。彼はそれまでに予言者ジョセフの話に非常な感銘を受けていたから、予言者の仕事についてもっと知りたいと思っていた。

五、イザヤの予言が事実となって現われる。　マーテン・ハリスは、ジョセフがそれまでに版から写しとった文字を一部出来上っていた飜訳と一しょに持ってニューヨークへ発って行った。彼の目的が正に何であったか、また心に何と思っていたかは明らかでない。しかし、彼が霊感によってそうするように導かれたことは後で証明される。彼は最初に、その写した文字と飜訳とを調べてもらいたいと言って、コロンビヤ・カレッヂのアントン教授の許へさし出した。それからまたそれらを同じくニューヨークのサムエル・L・ミッチェル教授のところへもって行った。そしてニューヨークから帰って来たときに次のように報告した。「私はニューヨーク市へ行って君が書き写して置いた文字を、それの飜訳と一しょに、これを文学上の学識で有名な一紳士チャールス・アントン教授に提出した。アントン教授が言われるに、この飜訳は正確である。エジプト語から飜訳されたものの中、これより正確なものをまだ見ないほどであると。そこで私はまだ飜訳してない文字を出して見せたところ、これはエジプト語、カルデヤ語、アッシリヤ語およびアラビヤ語などで、またその文字も本当の文字であると言われて、教授はパルマイラの人々にあてて『これらの文字は真正の文字にして、またこれらの文字より飜訳されたるものも正確なり』と言う一通の証明書を私に下さった。私はその証明書をとってかくしに入れ、さて正に教授の家を立ち去ろうとしたとき、アントン教授は私を呼び



<マーテン・ハリス>

返して、その青年はその金版を見つけた場所に金版のあることがどうしてわかったかと聞かれるから、それは一人の神の使がその青年に在り個所を明したのであると言った。すると教授は『ちょっとその証明書を見せて』と言われるから、私はその言に従ってそれをかくしから取り出してお渡しすると、教授はこれを寸々に引き裂いて『今時、天使が導きとめぐみを与えるなどと言うことがあるものか。私にその金版をもって来なさるなら飜訳してやる』と言われた。よって金版の一部は封ぜられているし、また持ってくることをとめられている、と告げた。すると教授は『私は封じてある書物を読むことはできぬ』と言われた。そこで私は教授の許を去ってミッチェル博士の許へ行ったが、同博士も文字と飜訳の両方に関しアントン教授の言われた言葉を承認された」と。

何年も経ってから、この時自分の与えた証詞が役に立つことを知ったとき、アントン教授はこのような人がこのような文字をもって自分に会うために訪ねて来たが、それは自分をかつぐために来たと思って応対したと自分から言ったけれども、マーテン・ハリスの言った言葉は否定した。マーテン・ハリスの説明した中にはささいな間違いがあったかも知れないが、それはイザヤの昔言った予言がほとんど文字通り事実となって現われたのであるから、大たいに於てマーテン・ハリスの話は本当であるにちがいない。当時マーテン・ハリスがイザヤの予言をよく知っていたとは思えないし、またもちろんアントン教授はマーテン・ハリスに答える際に予言を成就するというつもりは全くなかった。それにもかかわらず、予言が事実となって現われたことは本当である。

六、紛失した原稿。　マーテン・ハリスはアントン教授と会見したことによってその心に深い感銘を受け、ハーモニーへ移転してジョセフ・スミスを更に援助するようになった。マーテン・ハリスは千八百二十八年四月十二日ころハーモニーに着くとすぐに、予言者が記録の飜訳を口授するのを書き留め始めた。マーテンはこの仕事を六月の十四日までつづけたが、その時大判洋紙で百十六ページに及ぶ原稿ができ上っていた。マーテン・ハリスは書き役を始めてしばらくたった後、彼がこの仕事の中でしている役割に対し、彼をひどく非難している幾人かの懐疑的な友人に、その原稿をもって帰って見せてやる特権を与えてもらいたいと予言者に、しつこくたのんだ。マーテンはこの友人たちを納得(なっとく)させたかった。またその友人たちも、もちろんマーテンにぜひもってきて見せてくれと頼んだ。特にマーテンの妻はその原稿を一目見せてもらいたいと彼に泣きついたのであった。

伝道本部だより

支部所在地変更

西ノ宮　兵庫県西ノ宮市仁川町四ノ五四
岡山　岡山市弓野町六一
甲府　甲府市山田町六三
山形　山形市四日町五八〇
松本　松本市沢村町一六〇四

バプテスマ

金徳仙　阿倍野
中村園子　旭川
内川二三　福岡
松本房子　〃
安藤豪毅　〃
福田純子　〃
芦原春生　群馬
小茂田裕子　〃
小野里八千代　〃
平井弘子　〃
阿部富美子　広島
志村矩子　松本
青山京平　名古屋
長谷川恵子　〃
井上敦雄　岡町
小林広　〃
山田靖　〃
上滝信子　小樽
山田孝子　札幌
宮本喜代　〃
倉林凱　仙台
三浦浩子　〃
中村咲子　三宮
植田百合子　〃
作田忌身　東京中
舘野育恵　〃
高地登　〃
佐藤邦義　〃
奥山芳美　〃
大林さく子　〃
神名一公　〃
作田日出子　東京北
千葉茂　〃
岩崎正晃　〃
伊藤昌雄　〃
大城勝　〃
高木重吉　〃
本荘良子　東京南
今村悦子　〃
佐藤誠吉　〃
月井ユリ子　〃
内山弘子　柳井
比嘉和子　晋天間
安里マヤ子　〃
前田光政　那覇
仲宗根千枝子　〃
金今子　京城中
孫武子　釜山
崔順玉　〃
呉享煥　〃
呉仁竜　京城中
崔基鎬　京城東
金長烈　〃
金一基　〃
札鳳愛　〃
廉弼武　〃
李啓晃　〃
羅兼哲　京城中
許寧煥　〃
朴孝根　〃
梁容植　〃
任東剛　京城中
厳光雄　〃
張福順　〃
崔静子　〃
金善泰　京城西
朴駿煥　〃
元崗淵　〃
金容模　〃

神権

○執事
釜山　重岡政信　福岡
山口定男　岡町
山田勝丸　仙台
（韓国に四名）
○教師
深沢宏信　松本
（韓国にて一名）
○祭司
（韓国にて二名）

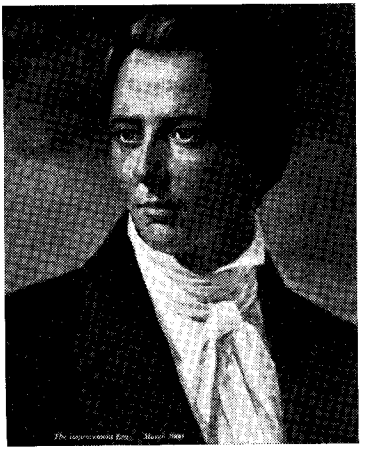
支部所在地

阿倍野	大阪市阿倍野区阪南町中一ノ三八
旭川	旭川市八条五丁目
福岡	福岡市薬院大通二ノ五五
群馬	高崎市並榎町二七五
広島	広島市古田町古江四〇〇ノ三
金沢	金沢市成瀬町一一ノ四　野田方
甲府	甲府市山田町六三
松本	松本市沢村町一六〇四
室蘭	室蘭市幸町八九
名古屋	名古屋市昭和区北山町三ノ四一
新潟	新潟市中大畑町五五七　金井方
西ノ宮	兵庫県西ノ宮市仁川町四ノ五四
岡町	大阪府豊中市岡町北二ノ一八
岡山	岡山市弓野町六一
小樽	小樽市富岡町一ノ三五
三ノ宮	神戸市灘区篠原本町四ノ三五
札幌	札幌市北二条西二四丁目
仙台	仙台市光禅寺通り二八
東京中央	東京都渋谷区八幡通一ノ三四
東京北	東京都豊島区椎名町四ノ二〇六八
東京南	東京都大田区南千束町二四九
東京西	東京都武蔵野市吉祥寺三六八
山形	山形市八日町五八〇
柳井	山口県柳井市今市三九一
横浜	横浜市港北区篠原町二九
普天間	沖縄宜野湾村野嵩区三二八
那覇	沖縄那覇市松尾区一三九

編集後記

「時間」は本質として連続していますが、竹に節があり、四季に節があり、扇の地紙に「折り目」があるように、人は「時間」に「折り目」をつけて、日と月と年とを刻みつけて「大みそか」があり「元旦」があることになったのです。「折り目」は一種の締めくくりであり、旧いものから新しいものが展開してくる「転機」であります。数学者デテキントは連続している「数」に「切断」を施して「数」の本質を解明しました。私は連続しているそのものの本質に直接触れないで、いわゆるノッペラボーなものの中から千差万別を生ぜしめる「折り目」を施す方がはるかに優っていると思います。「大みそか」から「元旦」への移り変り、そこには「折り目」こそあっても「切断」はないはずです、昔から「折り目」は正しくせよと言われています。「折り目」を正しくして旧い千九百六十年を回想という過去の影へ折り込んだこの千九百六十一年から新しいより良いものを展開いたしましょう。今年こそ「聖徒の道」を大いに発展させる年であります。皆さまの御支援を切にお願いいたします。

（佐藤）



写真説明—予言者ジョセフ・スミス

月刊「聖徒の道」第五巻第一号
一九六一年一月一日発行
実価　一カ年　四五〇円
一　部　四十円
編集兼発行人　ポール・C・アンドラス
発行所　東京都港区麻布広尾町十四
末日聖徒イエス・キリスト教会
北部極東伝道部

聖徒の道
一九五八年三月十七日 第三種郵便物認可 第五巻第一号
振替口座東京七六二二六番
発行人 ポール・C・アンドラシス
編集人 末日聖徒イエス・キリスト教会 北部極東伝道部
発行所 東京都港区麻布広尾町十四

内案書図

教義と聖約
高価なる真珠 上質革製合本…一一〇〇円
モルモン経
教義と聖約 合本……三〇〇円
高価なる真珠
モルモン経（新訳）……二〇〇円
信仰箇条の研究……三三〇円
モルモンとは……一〇〇円
完成への道……二〇〇円
初等協会教科書……一五〇円
総合聖句の手引……一五〇円
日本系図探究要覧……一〇〇円
古代アメリカの生活……一〇〇円
旧約聖書物語……一五〇円
家督権の祝福……一〇〇円
扶助協会手引……五〇円

日曜学校用

宗教と生活 II……一五〇円
よきおとづれ……一〇〇円
聖書物語……一五〇円
福音の実践……一五〇円
聖典中の指導者……一五〇円

MIA用

役員と指導書の手引……一〇〇円
モルモン経研究ガイド……一〇〇円
真理の道……一〇〇円
MIA手引（付録）……五〇円
演劇指導者基礎知識と脚本集……七五円
演説が上手になる法……一五〇円
社交ダンス必携……一六〇円
新しいフォークダンス……五〇円

讃美歌及び歌集

末日聖徒讃美歌……三〇〇円
末日聖徒讃美歌抜萃……三〇〇円
子等は歌う……一〇〇円
レクリエーション歌集……四〇〇円

……註文は各支部長へ……